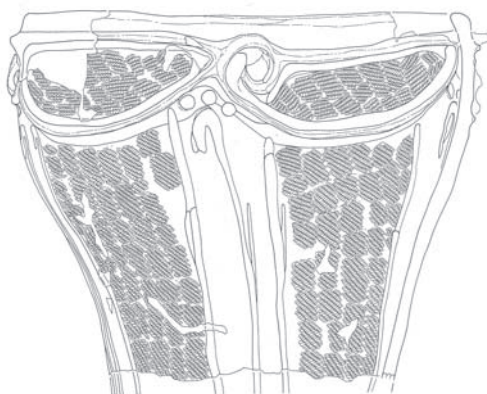


# 今 宿 遺 跡

—— 第30次調査 ——

宅地造成に伴う 埋蔵文化財発掘調査報告書



2009

埼玉県狭山市遺跡調査会

いま じゆく い せき  
今 宿 遺 跡

第30次調査

宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2009

埼玉県狭山市遺跡調査会

# 序

狭山市内の遺跡は、市域中央を貫流する入間川の左右両岸に、川に沿う形で所在しています。いずれも当時の人々の生活を知るうえで、たいへん貴重なものです。しかし、昭和40年代後半より増加した諸々の開発行為により、これらの遺跡は破壊の危機にさらされることとなります。狭山市では、それら開発行為によって消滅してしまう埋蔵文化財を事前に発掘調査し、記録保存に努めてまいりました。

本報告書は、平成11年度に宅地造成に伴い実施した今宿遺跡第30次調査の成果をまとめたものです。この調査では、縄文時代中期後半の竪穴住居跡3軒と土壙1基が発見されました。今宿遺跡は、奈良・平安時代を主体とする集落遺跡ですが、この成果と過去の調査結果により遺跡の西側に、期間の限られた比較的小規模な縄文時代中期の集落が残されていることが明らかになりました。

この報告書が、当地域の研究と埋蔵文化財に対する理解を深めるとともに、市民の皆様の生涯学習に資するものになれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査においてご理解、ご協力いただいた地権者、また献身的に調査に従事し、報告書刊行までご協力いただいた協力員の方々に厚く御礼申し上げます。

平成21年2月

狭山市遺跡調査会  
会長 門倉 節明

# 例 言

1. 本書は狭山市上広瀬地内所在の今宿遺跡第30次調査の報告書である。
2. 本書で報告する発掘調査は宅地造成に伴うもので、狭山市遺跡調査会が発掘調査を実施し、調査費用は地権者が負担した。
3. 発掘調査届に対する埼玉県の手指示通知番号は以下のとおりである。  
平成12年1月4日付 教文第2 - 117号
4. 発掘調査期間は、整理・報告書作成期間は、以下のとおりである。  
発掘調査：平成11年11月4日～平成11年11月22日  
整理・報告書作成：平成20年4月1日～平成20年12月19日
5. 発掘調査は小淵良樹が担当した。また、岩川静子、清水りつ子、白石明子、中川吉子、藤本町子、古田充子、宮美知子、森和子、山崎哲子が参加した。
6. 図版の作成と出土品の整理は石塚和則が担当した。また、雨宮吾郎、岸幸子、小林はつみ、瀬戸山真由美、橋本弓子の補助を受けた。
7. 本書の執筆は石塚があたった。
8. 本書の編集は狭山市遺跡調査会が行った。
9. 発掘調査及び報告書作成にあたり、下記の諸氏並びに諸機関から御教示・御協力を賜った。厚く感謝の意を表する（敬称略、五十音順）  
金子直行 中平 薫 早川修司 細田 勝 松本尚也 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団  
埼玉県教育委員会市町村支援部生涯学習文化財課 日高市教育委員会

# 凡 例

1. 挿図の縮尺は以下のとおりである。また、各挿図にスケールを付した。  
遺跡分布図：1 / 50,000、調査区位置図：1 / 2,500、調査区全測図：1 / 200、遺構実測図：1 / 60、  
遺物実測図：1 / 3、1 / 4
2. 遺構平面図の方位は座標北を、遺構断面図の水糸レベルは、海拔高を示す。
3. 遺構の表記記号は以下のとおりである。  
住居跡：SJ、土壇：SK
4. 本報告書に掲載した出土品は狭山市教育委員会で保管している。

# 目 次

序

例言

凡例

目次

挿図目次

図版目次

調査の概要.....	1
1 発掘調査に至る経過 .....	1
2 発掘調査の組織 .....	1
3 発掘調査の経過 .....	2
遺跡の立地と環境 .....	3
1 地理的環境 .....	3
2 歴史的環境 .....	3
3 遺跡の概要 .....	8
遺構と遺物.....	10
1 調査成果の概要 .....	10
2 検出遺構と出土遺物 .....	10
住居跡 .....	10
土壌 .....	13
出土遺物 .....	13
まとめ .....	18

# 插图目次

第1图	狭山市遺跡分布図	4	第7图	第74・141号住居跡出土遺物	14
第2图	今宿遺跡第30次調査区位置図	8	第8图	第142号住居跡出土遺物(1)	15
第3图	今宿遺跡第30次調査区全測図	9	第9图	第142号住居跡出土遺物(2)	16
第4图	第74号住居跡	11	第10图	第107号土壌出土遺物	16
第5图	第141号住居跡	12	第11图	表採遺物	16
第6图	第142号住居跡・第103号土壌	13	第12图	加首利E式期の住居跡	21

# 図版目次

図版1	今宿遺跡第30次調査区全景 第74号住居跡全景(第4次調査)	図版4	第141号住居跡炉跡 第141号住居跡屋内埋嚢
図版2	第74号住居跡全景(第30次調査) 第74号住居跡遺物出土状況 (第4次調査)	図版5	第142号住居跡全景 第142号住居跡炉跡
図版3	第74号住居跡屋内埋嚢 第141号住居跡全景	図版6	第142号住居跡屋内埋嚢 第30次調査出土遺物

# 調査の概要

## 1 発掘調査に至る経過

平成11年9月に、株式会社飯田産業より狭山市上広瀬915の土地における埋蔵文化財の所在について照会があり、それに対して狭山市教育委員会は埋蔵文化財包蔵地台帳により今宿遺跡に該当する旨を回答した。その後、埋蔵文化財の確認調査の依頼を受けて、同教育委員会が平成11年10月7日に確認調査を実施した結果、竪穴住居跡1軒が検出された。過去の調査結果と照合したところ、この住居跡は平成3年度の第4次調査で検出された第74号住居跡の残り部分であることが確認された。この結果について開発者に連絡するとともに、地権者との協議を開始し、検出した遺構周辺にかかる144㎡について埋蔵文化財発掘調査の実施することで合意に達した。開発者は平成11年11月後半の工事開始を予定しており、対応が急がれるところであったので、10月20日付で狭山市遺跡調査会と地権者間で業務委託契約を締結、諸準備を経て11月4日に発掘調査を開始した。

本調査の文化財保護法第57条第1項の規定による埋蔵文化財発掘調査届に係る埼玉県教育委員会教育長の指示通知は例言に示したとおりである。

遺跡名	所在地	調査面積	時代
今宿遺跡 (県遺跡番号22-002)	狭山市上広瀬915	144㎡	縄文・奈良・平安

## 2 発掘調査の組織

### 1) 発掘調査(平成11年度)

主体者	狭山市遺跡調査会	会長	野村甚三郎 (狭山市教育委員会教育長)
		理事	斎藤勝治 (狭山市文化財保護審議会委員長)
		理事	横田武雄 (狭山市教育委員会教育次長)
事務局	狭山市遺跡調査会	事務局長	梅田久詞 (社会教育課長)
		事務局	小淵良樹 (社会教育課主査)
		事務局	原 肇 (社会教育課主任)
		事務局	石塚和則 (社会教育課主任)
調査担当			小淵良樹

### 2) 整理・報告書作成(平成20年度)

主体者	狭山市遺跡調査会	会長	門倉節明 (狭山市教育委員会教育長)
		理事	中内丈夫 (狭山市文化財保護審議会委員長)
		理事	池原昭治 (狭山市文化財保護審議会副委員長)
		理事	中込利男 (狭山市文化財保護審議会委員)
		理事	松本晴夫 (狭山市教育委員会生涯学習部長)
事務局	狭山市遺跡調査会	事務局長	白倉 孝 (社会教育課長)
		事務局	半貫芳男 (社会教育課主査)

事務局	石塚和則	(社会教育課主査)
事務局	田口 勉	(社会教育課主任)
事務局	三ツ木康介	(社会教育課主事補)
整理担当	石塚和則	

### 3 発掘調査の経過

発掘調査は、狭山市教育委員会が平成11年10月7日に行った埋蔵文化財確認調査の結果を受け、工事予定区域のうち、遺構が確認された144㎡を対象として実施した。調査の経過は、以下のとおりである。なお、遺構番号は昭和44年度に埼玉県遺跡調査会が実施した第1次調査から連番となっている。

平成11年度

11月4日(木)

機材搬入。遺構確認開始。当初検出されていた第74号住居跡の残り部分に加えて、2軒の住居跡と土壌1基検出。住居跡は第141・142号住居跡、土壌は第103号土壌とする。住居跡は、いずれも縄文時代中期後半、加曽利E～式期の所産である。

11月5日(金)

第74号住居跡掘り下げ開始。遺物出土量は比較的多い。第141号住居跡、床面精査。炉跡、屋内埋嚢を確認。第103号土壌、掘り下げ終了。第142号住居跡は炉跡プランを確認。

11月8日(月)

第74号住居跡掘り下げ終了。床面精査。壁溝、柱穴、屋内埋嚢を確認。屋内施設掘り下げ。第141号住居跡、平面図、エレベーション図作成。第142号住居跡、屋内埋嚢調査。

11月9日(火)

第74号住居跡、平面図、エレベーション図作成。屋内埋嚢調査。第141号住居跡、炉跡、屋内埋嚢調査。平面図、エレベーション図作成。第142号住居跡、屋内埋嚢図面作成。並行して炉跡調査。埋設土器確認。平面図、エレベーション図作成。

11月10日(水)

調査区全景写真及び遺構個別写真撮影。第74・141号住居跡、屋内埋嚢取り上げ。第142号住居跡、炉跡写真撮影。調査終了。

11月11日(木)

機材撤収。

11月22日(月)

調査区埋め戻し。現地作業終了。



# 遺跡の立地と環境

## 1 地理的環境

狭山市域を北東流する入間川は、外秩父山地の伊豆ヶ岳・武川岳等を水源とする名栗川と青梅市に水源を持つ成木川、その他小河川を合わせて市域に入り、流域を開折して北側の左岸には二段、南側となる右岸には三段の河岸段丘を発達させ、さいたま市と川越市の境界付近で荒川に合流する。

本遺跡の所在する入間川左岸の通称入間台地は、入間川をはさんで南側に狭義の武蔵野台地と対峙し、北側は越辺川によって区切られている。その南縁である入間川左岸流域には、旧石器時代から中世に至る多くの遺跡が立地している。市内遺跡は、北から宮ノ越遺跡、城ノ越遺跡、御所の内遺跡、小山ノ上遺跡、烏ノ上遺跡、森ノ上遺跡等が立地し、若干離れて上広瀬古墳群、今宿遺跡、金井上遺跡、宮地遺跡、東八木窯跡群等が帯状に連なる。また、入間川の北を流れる南小畔川と入間川の間は比較的平坦に見えるが、旧地形は多くの小河川によって開折された小支谷に、埋没谷を含めて非常に複雑な地形を呈している。このような小河川の一つ、智光山公園内に水源を持つ現在の5号幹線水路の両岸には、丸山遺跡、宮原遺跡を始めとする多くの縄文時代遺跡が分布している。

入間川右岸は武蔵野台地に属する旧多摩川の隆起扇状地で、北から稻荷上遺跡、揚櫃木遺跡、坂上遺跡、戸張遺跡、中原遺跡、峰遺跡、滝祇園遺跡等が左岸の遺跡群に対峙する形で集落を形成している。右岸域は地下水脈に乏しく飲料水の確保が困難であるため、入間川の存在もさることながら、遺跡形成は段丘崖線沿いの湧水点を基盤としていたと考えられ、それを証するように、左岸の様相とは異なり内陸部、所沢市方面に行くに従い遺跡数は激減する。

## 2 歴史的環境

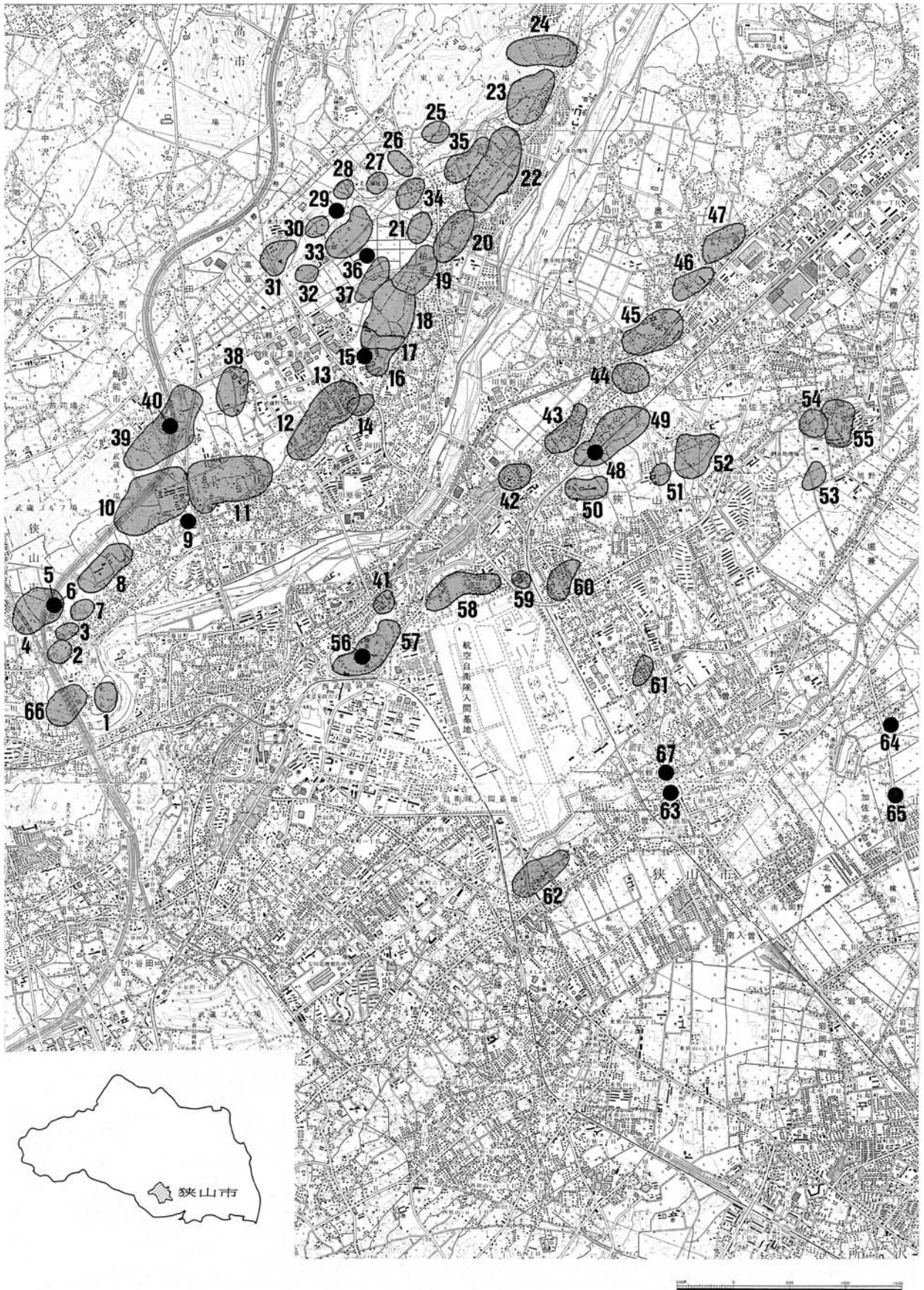
狭山市内には67箇所の遺跡が所在する（第1図）が、その大多数が縄文時代と奈良・平安時代の複合集落遺跡である。昭和60年代以降、首都圏中央連絡自動車道（以下、圏央道）関係の調査を含めて、数々の発掘調査が実施され、多くの成果が上げられている。これらの成果の蓄積と継続的に行う分析により、今後市域を含めた本地域の歴史的動態を明らかにしていくことが可能となろう。ここでは、近年の新知見を加えて概述するとともに、市内の各時代の遺跡群を俯瞰することにする。

旧石器時代の遺跡としては、平成2年度から平成3年度にかけて（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団が首都圏中央連絡自動車道建設に伴って実施した西久保遺跡（39）発掘調査において、旧石器時代の石器製作跡が多数発見され、当市における当該時代の一端が明らかとなった。狭山市遺跡調査会でも、平成6年度に同遺跡の発掘調査を行い、武蔵野台地第4層下部の良好な資料を得ている。また、宮地遺跡（8）では細石刃、細石核が表採されている。

縄文時代の遺跡は、大略草創期から後期後半までが確認されているが、早期未までは土壌、炉跡などの遺構が検出されるに留まる。集落の呈をなすのは前期黒浜期以降で、遺跡数の急激な増加でも画期となり得るが、集落規模の拡大、長期化の面では中期中葉勝坂期から後葉加曾利E期のものが大勢を占め、この時期偏差が市内の縄文時代遺跡を特徴づけている。過去の調査事例もこの時期に集中する。

草創期の遺跡としては、入間川左岸の金井上遺跡（10）、西久保遺跡（39）、上広瀬上ノ原遺跡（11）、





第1図 狭山市遺跡分布図



狭山市内遺跡一覧（括弧内は県遺跡番号）

- 1 東八木窯跡群（22049）奈・平
- 2 八木遺跡（22068）縄（前・中）奈・平
- 3 八木北遺跡（22021）奈・平
- 4 八木上遺跡（22022）縄（前・中）奈・平
- 5 沢口上古墳群（22020）古（後）
- 6 笹井古墳群（22019）古（後）
- 7 沢口遺跡（22080）縄（早～中）古、奈・平
- 8 宮地遺跡（22018）縄（中）奈・平
- 9 金井遺跡（22071）中
- 10 金井上遺跡（22023）縄（草・前）奈・平、中
- 11 上広瀬上ノ原遺跡（22005）縄（草）奈・平
- 12 霞ヶ丘遺跡（22004）縄（中）奈・平
- 13 今宿遺跡（22002）縄（早～中）奈・平
- 14 上広瀬古墳群（22001）古（後）
- 15 森ノ上西遺跡（22079）先
- 16 森ノ上遺跡（22008）縄（中）奈・平
- 17 富士塚遺跡（22009）縄（中）奈・平
- 18 鳥ノ上遺跡（22010）奈・平
- 19 小山ノ上遺跡（22011）縄（中・後）古～中
- 20 御所の内遺跡（22012）奈・平
- 21 英遺跡（22074）奈・平、中
- 22 城ノ越遺跡（22013）縄（前・中）奈・平、中
- 23 宮ノ越遺跡（22016）縄（前・中）奈・平
- 24 字尻遺跡（22075）縄（前～後）奈・平
- 25 丸山遺跡（22037）縄（早・前～後）奈・平
- 26 金井林遺跡（22035）縄（前～後）
- 27 鶴田遺跡（22044）縄（前・中）
- 28 上ノ原東遺跡（22065）奈・平
- 29 上ノ原西遺跡（22063）縄（中）
- 30 半貫山遺跡（22061）中
- 31 稻荷山遺跡（22058）縄（後）
- 32 前山遺跡（22059）縄（中）
- 33 高根遺跡（22062）縄（早・中・後）
- 34 町久保遺跡（22034）縄（中）奈・平、中
- 35 宮原遺跡（22017）縄（前～後）
- 36 下双木遺跡（22078）縄（草）
- 37 上双木遺跡（22077）縄（中・後）奈・平
- 38 上広瀬西久保遺跡（22073）奈・平
- 39 西久保遺跡（22069）先、縄（草）奈・平
- 40 東久保遺跡（22070）先
- 41 上諏訪遺跡（22086）縄（中・後）
- 42 滝祇園遺跡（22066）縄（草～後）古、奈・平
- 43 峰遺跡（22024）縄（中・後）奈・平
- 44 戸張遺跡（22026）縄（前・中）奈・平
- 45 揚榎木遺跡（22027）縄（前・中）奈・平
- 46 坂上遺跡（22029）縄（中）奈・平
- 47 稻荷上遺跡（22032）縄（前・中）奈・平
- 48 上中原遺跡（22025）先
- 49 中原遺跡（22025）縄（早～後）奈・平
- 50 沢台遺跡（22079）縄（中）奈・平
- 51 沢久保遺跡（22041）縄（中）
- 52 下向沢遺跡（22042）縄（中・後）奈・平
- 53 吉原遺跡（22067）縄（前）
- 54 下向遺跡（22085）縄（前～後）
- 55 台遺跡（22084）縄（前～後）
- 56 稻荷山公園古墳群（22052）古（後）
- 57 稻荷山公園遺跡（22051）縄（中）
- 58 石無坂遺跡（22083）縄（中）奈・平
- 59 富士見西遺跡（22082）縄（中）奈・平
- 60 富士見北遺跡（22072）縄（前・中）奈・平
- 61 富士見南遺跡（22081）縄（中）
- 62 町屋道遺跡（22088）縄（前～後）奈・平
- 63 七曲井（22046）中
- 64 堀兼之井（22047）中
- 65 八軒家の井（22076）中
- 66 八木前遺跡（22087）縄（前・後）
- 67 堀難井遺跡（22089）中

下双木遺跡（36）、丸山遺跡（25）、右岸では滝祇園遺跡（42）と市内各地で当該期のものと考えられる尖頭器が出土している。今後も単独出土例が増加するものと思われるが、現時点では土器を伴っていないため本期の詳細については不明である。

早期では押型文土器の小破片が高根遺跡（33）で出土している他、同一水系の日高市向山遺跡では本段階の住居跡6軒が検出されており、南小畔川右岸沿いには該期の遺跡が多く分布する可能性が指摘できる。早期後半では、今宿遺跡（13）で祭痕文系土器を伴う炉穴が検出されている。

前期前半は花積下層式土器が今宿遺跡で、関山式土器が宮原遺跡（35）で出土しているが、未だ遺構の検出を見ていない。黒浜期には、市内でもまとまった集落調査例がある。昭和56年に調査された入間川右岸の揚櫃木遺跡（45）では、段丘崖に沿って線状に展開する住居跡群が検出されている。本遺跡に近接する稲荷上遺跡（47）でも同時期の遺構が検出され、良好な一括資料を得ている。左岸では笹井地区に該期遺跡の集中があり、八木前遺跡（66）、八木遺跡（2）、八木上遺跡（4）では、圏央道関連の調査において黒浜期の遺構が調査され、これらを含めれば入間川両岸にわたって黒浜期集落が展開していた様相が明確である。諸磯期以降の遺跡としては、笹井に所在する金井上遺跡、八木上遺跡（4）があり、前者では前期後半の包含層、後者では前期終末期の住居跡が1軒検出されている。

中期には表面採集資料も含めてであるが、遺跡数は39箇所と急増し市内遺跡全体の60%を超える。代表的な遺跡としては、入間川左岸では丸山遺跡（25）、後期後半までの継続が確認されている宮原遺跡が市域東部の柏原に、大規模な集落跡として著名な宮地遺跡が市域西部の笹井に位置する。入間川右岸の遺跡としては稲荷上遺跡があり、近年の調査により中期後半の遺構が多数検出されている。宮地遺跡は現在までに7次にわたる調査が実施されている。100軒に及ぶ住居跡が検出され、それらの分布状況から双環状集落であることが確認された。主体となる時期は、勝坂期中頃から加曾利E期に及ぶが、称名寺式土器を伴う土壌も検出されており、後期初頭まで継続するのは確実とみられる。中期末から後期初頭では、周辺地域にも認められるように集落規模は急速に縮小する。中期末では、入間川左岸において前述の宮地遺跡、柏原の森ノ上遺跡（16）、字尻遺跡（24）、右岸では揚櫃木遺跡（45）等、市内各地で継続期間が限定的な小規模な集落跡が確認されており、加曾利E期から後期初頭の柄鏡形住居跡が数軒単位で検出されている。柄鏡形住居跡は、周辺の入間市、飯能市、日高市でも多くの検出例があり、県内でも入間地方は本種遺構の分布密度が濃いと思われる。

縄文時代晩期から弥生時代にかけては、当市では確認例が非常に少なく、森ノ上遺跡の土壌から弥生時代後期から古墳時代前期と考えられる搬入土器が一点出土しているのみである。

古墳時代の遺跡として当市には沢口上古墳群（5）、笹井古墳群（6）、上広瀬古墳群（14）、稲荷山公園古墳群（56）と滝祇園遺跡（42）が所在する。現在まで調査が実施されたのは笹井古墳群、上広瀬古墳群で、7世紀後半のものと考えられる。笹井古墳群は石室の構造が特異なため、奈良時代以降の墳墓の可能性も否定できない。当該期の集落遺跡は、現在のところ滝祇園遺跡（42）が唯一であり、竪穴住居跡1軒が検出されている。

奈良・平安時代の集落は入間川左岸に帯状に23遺跡、右岸は久保・不老川流域を含めて14遺跡存在する。市域での集落形成の契機は、高麗郡の建郡と考えられる。高麗郡は渡来人の高度な技術で未開発地域の開墾を進めようとする中央政府の意図によって東海道・東山道に分散していた渡来人が集められ、霊亀2年（716年）に入間郡の一部を割いて設置された郡である。当地方に移住してきた渡来人たちがもたらした

技術は、主に窯業技術と鉄製品生産技術と考えられており、窯業については東八木窯跡（1）を含む東金子窯跡群の操業開始が、鉄製品生産技術に関しては羽口や鉄滓の出土状況から推定される小鍛冶の開始と在地産鉄製品の普及がその例として挙げられる。

8世紀中頃に東金子窯跡群での須恵器生産が開始され、入間川両岸での居住もほぼ同時期に開始されたと考えられる。当該期の遺跡として宮ノ越遺跡（23）、森ノ上遺跡、小山ノ上遺跡（19）、揚櫃木遺跡等が挙げられ、東金子古段階の前内出窯古式とそれに並行する南比企の須恵器が出土している。

若干時代が下る8世紀後半から9世紀初頭には前内出窯新式の須恵器が普及し、入間川左岸の宮ノ越遺跡、城ノ越遺跡（22）、上広瀬上ノ原遺跡（11）、小山ノ上遺跡、森ノ上遺跡、宮地遺跡では東金子産の須恵器の割合が南比企産を圧倒的に上回る。窯に近くなるほどこの東金子産の割合が大きくなるのだが、右岸の揚櫃木遺跡では東金子窯跡群に近いにもかかわらず南比企産の須恵器が出土量遺物の1/3を占める。

9世紀中頃には、東金子窯産須恵器が当地方で広く使用されるようになる。入間川左岸では宮ノ越遺跡から城ノ越遺跡、御所の内遺跡（20）、小山ノ上遺跡、森ノ上遺跡、上広瀬上ノ原遺跡、霞ヶ丘遺跡（12）、今宿遺跡、金井上遺跡、宮地遺跡へと連続と集落が形成されているが、当該期とされる住居跡が圧倒的に多い。右岸でも稻荷上遺跡、揚櫃木遺跡、戸張遺跡（44）、中原遺跡（49）、峰遺跡（43）、滝祇園遺跡と、左岸ほどではないがやはり帯状に集落が形成されている。このような集落規模の拡大や住居跡軒数の増加は、承和12年（845年）に開始された国分寺の再建が契機となり、八坂前・新久A-1・2窯（入間市）で瓦焼成が行われたことによる大規模な人資の流入が直接的な要因と考えられる。また、東金子窯跡群の生産も増加し、例えば揚櫃木遺跡では東金子産須恵器が左岸の遺跡と同等の9割合を占めるようになる。

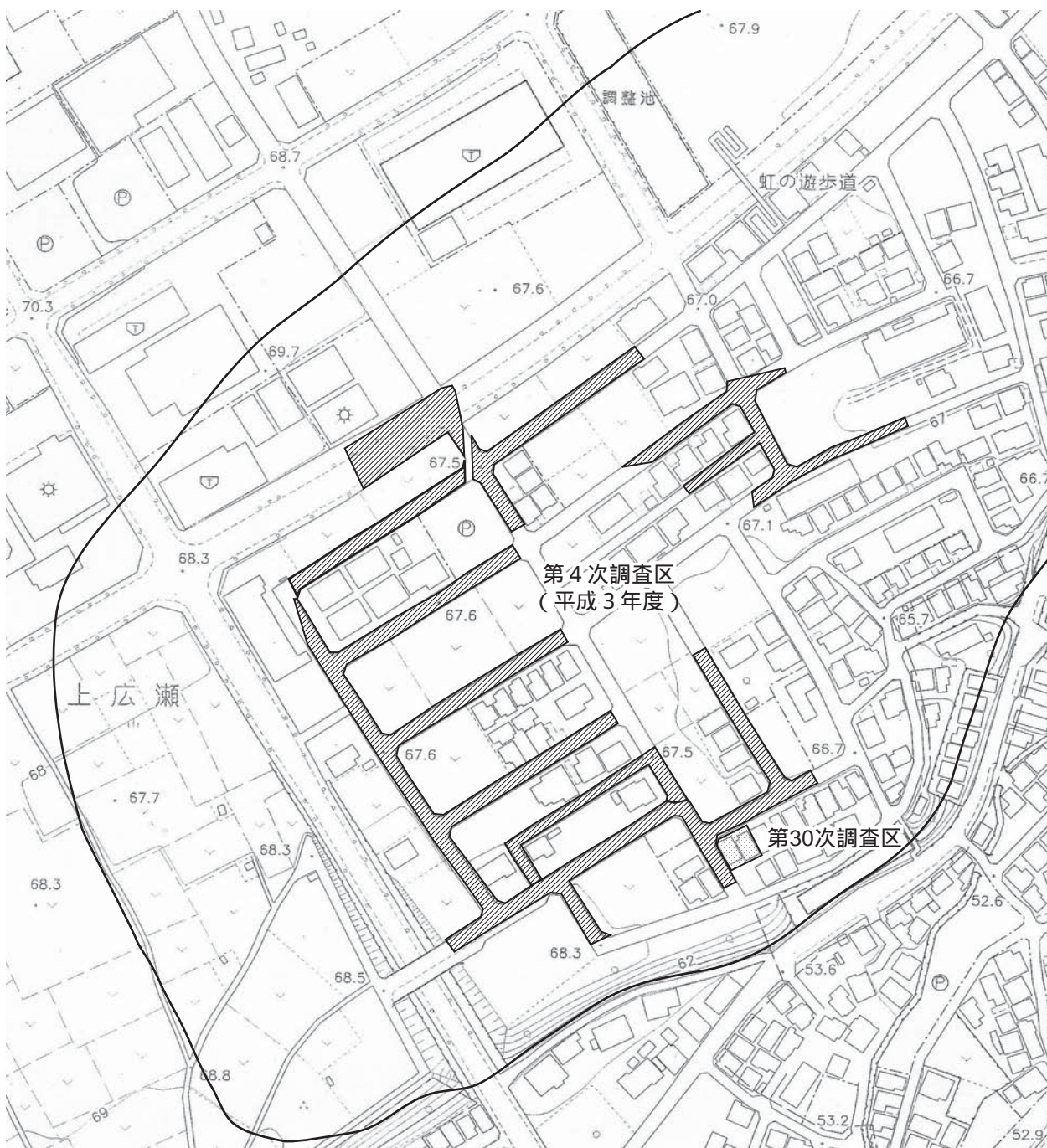
9世紀後半以降、住居数は次第に減少し、入間川両岸における住居数や密度の差異はほとんど見られなくなる。当該期の遺跡である宮ノ越遺跡、城ノ越遺跡、小山ノ上遺跡、今宿遺跡、稻荷上遺跡、揚櫃木遺跡、戸張遺跡、中原遺跡からは新久A-1・2窯からD-1・3窯の東金子系須恵器が出土するが約半数は還元焰焼成が上手く行われていない。これに伴い、土師質須恵器の坏や壺も出現し始める。これら状況は、長期操業の弊害である燃料材不足など生産に関わる諸環境の悪化や、さらに国分寺再建事業の終了による窯跡群の衰退を明確に示していると思われる。瓦焼成終了後も須恵器は生産されているが、生産規模は縮小されており、操業を終えるとともに周辺集落の人口も減少していったものと考えられる。

中世以降の遺跡としては、鎌倉街道上道と主要支道である堀兼道が市域を貫いているおり、一部には道路状の切り通しが往時の遺構として残存している。また、この路線に沿って七曲井や堀兼之井などの所謂「まいまいず井戸」が点在する。これらの井戸は、奈良・平安時代に由来すると考えられるが、七曲井は近世に至るまで修復され使用された記録が残されている。入間川左岸では、柏原に中世末の遺構とされる城山砦が城ノ越遺跡内に所在する。同じく柏原所在の小山ノ上遺跡で、平成5年度の調査で幅約6m、深さ2.8m前後を測る大規模な堀跡が検出されている。同遺跡では昭和60年度の（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団による調査でも館跡と考えられる堀跡が検出されており、両者の関係が注目される。なお、隣接する鑄造遺跡とされる英遺跡でも同規模の堀跡が検出され、覆土中から15世紀末の内耳鍋、かわらけが出土している。いずれにしても、中世については断片的な遺構検出に留まっており、該期以降の市域の様相について、文献資料を補強する意味でも今後の考古資料の増加が望まれる。

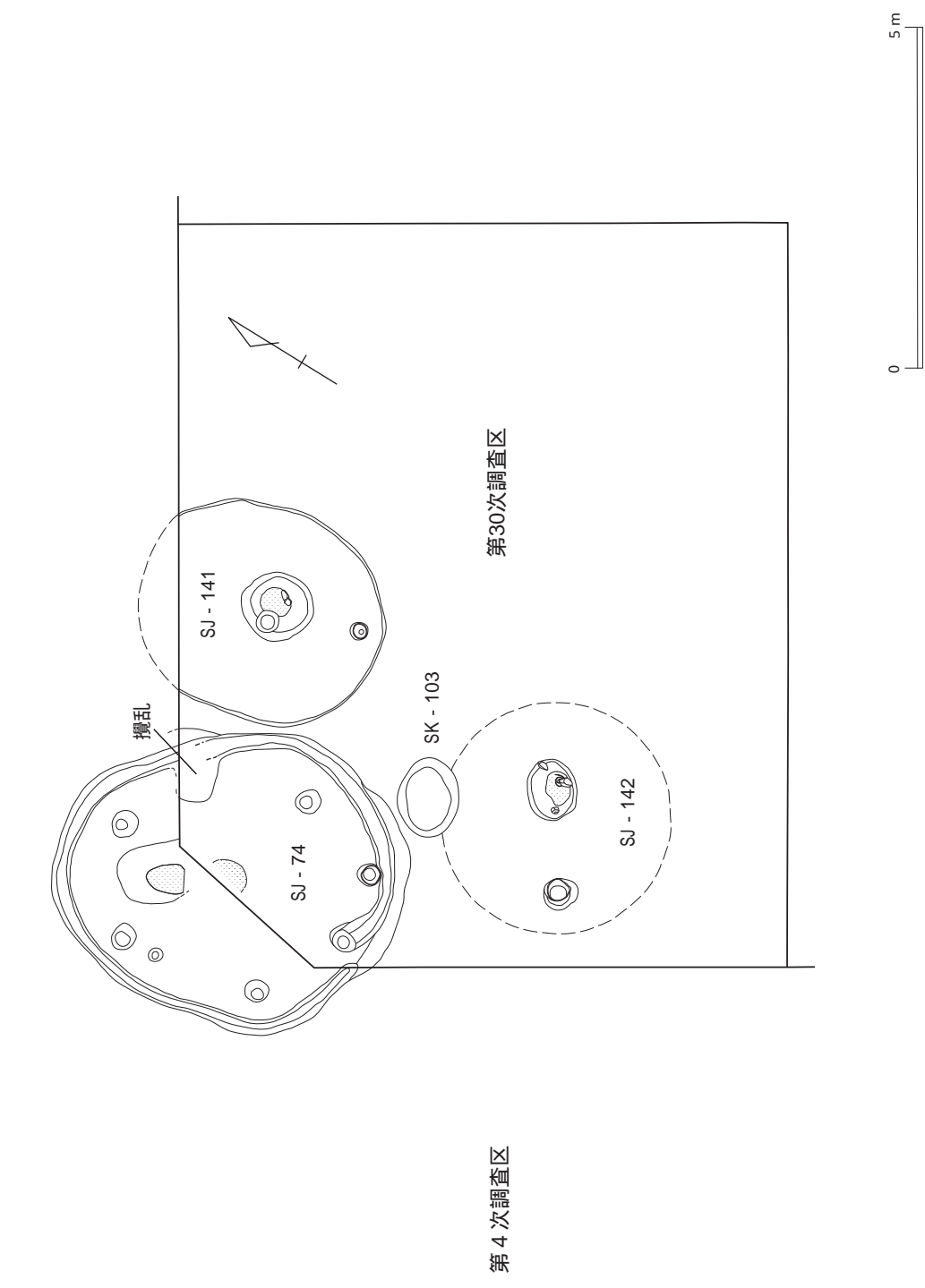


### 3 遺跡の概要

今宿遺跡は、縄文時代早期から中期および奈良・平安時代の集落遺跡で、狭山市上広瀬地内、西武新宿線狭山市駅から北西へ直線距離約2kmに位置し、入間川左岸の通称入間台地上に立地する。標高は遺跡北西端で67m、東端で56mを測り、緩やかな傾斜が認められる。南側の段丘下位面との境は急崖となり、比高差は12mを測る。周辺遺跡としては、南西側には上広瀬上ノ原遺跡、東側に上広瀬古墳群が立地し、後者は今宿遺跡内に広がりを持つものと思われる。本遺跡では、現在までに31次にわたる調査が実施されている。検出された遺構は住居跡142軒、掘立柱建物跡40棟、土壌107基、集石土壌1基、炉穴1基、溝6条、古墳2基で、大半が奈良・平安時代のものであるが、小規模な縄文時代中期の集落跡の存在が確認されている。



第2図 今宿遺跡第30次調査区位置図



第3図 今宿遺跡第30次調査区全測図

# 遺構と遺物

## 1 調査成果の概要

調査の結果、検出された遺構は縄文時代中期後半の竪穴住居跡3軒（内1軒は第4次調査で検出された第74号住居跡の残り部分）土壇1基である（第3図）。各住居跡からは中期後半加曾利E式後半、加曾利E式後半（吉井城山段階）の土器が出土した。今回の調査区は今宿遺跡でも西側に寄った位置にあり、過去の調査結果と今回の成果を鑑みると、中期後半から中期末にかけての比較的限定された時期の小規模な集落跡が展開しているのが明確となった。

なお、出土遺物及び遺構の時期の記述は、谷井彪・細田勝両氏の編年案（谷井・細田1997）等に準じた。

## 2 検出遺構と出土遺物

### 住居跡

#### 第74号住居跡（第4図）

本住居跡は、平成3年度に実施された第4次調査において、既に遺構北側及び西側の一部が調査されている（未報告）。今回の調査で南東側が検出され、遺構の全体形が明らかになったものである。牛蒡の耕作痕が床面に及んでおり、特に遺構北側に攪乱が顕著であった。

平面プランは南側が膨らむ、やや不整な楕円形を呈する。炉跡と屋内埋嚢を結んだ線を主軸とすると、主軸方位はN - 30° - Wを指す。規模は長径5.40m、短径4.55m、深さは20～23cmを測る。床面は概ね平坦で全体的に堅緻であるが、炉跡周辺は特に硬化が顕著であった。ピットは6箇所検出され、深さからP6以外は主柱穴と考えられる。深さは、P1 = 65cm、P2 = 70cm、P3 = 62cm、P4 = 73cm、P5 = 67cm、P6 = 25cmを測る。P1～5は不整な五角形に配置されている。壁溝はP3付近で途切れる他は全周する。幅は20～30cm、深さ8cm前後を測る。

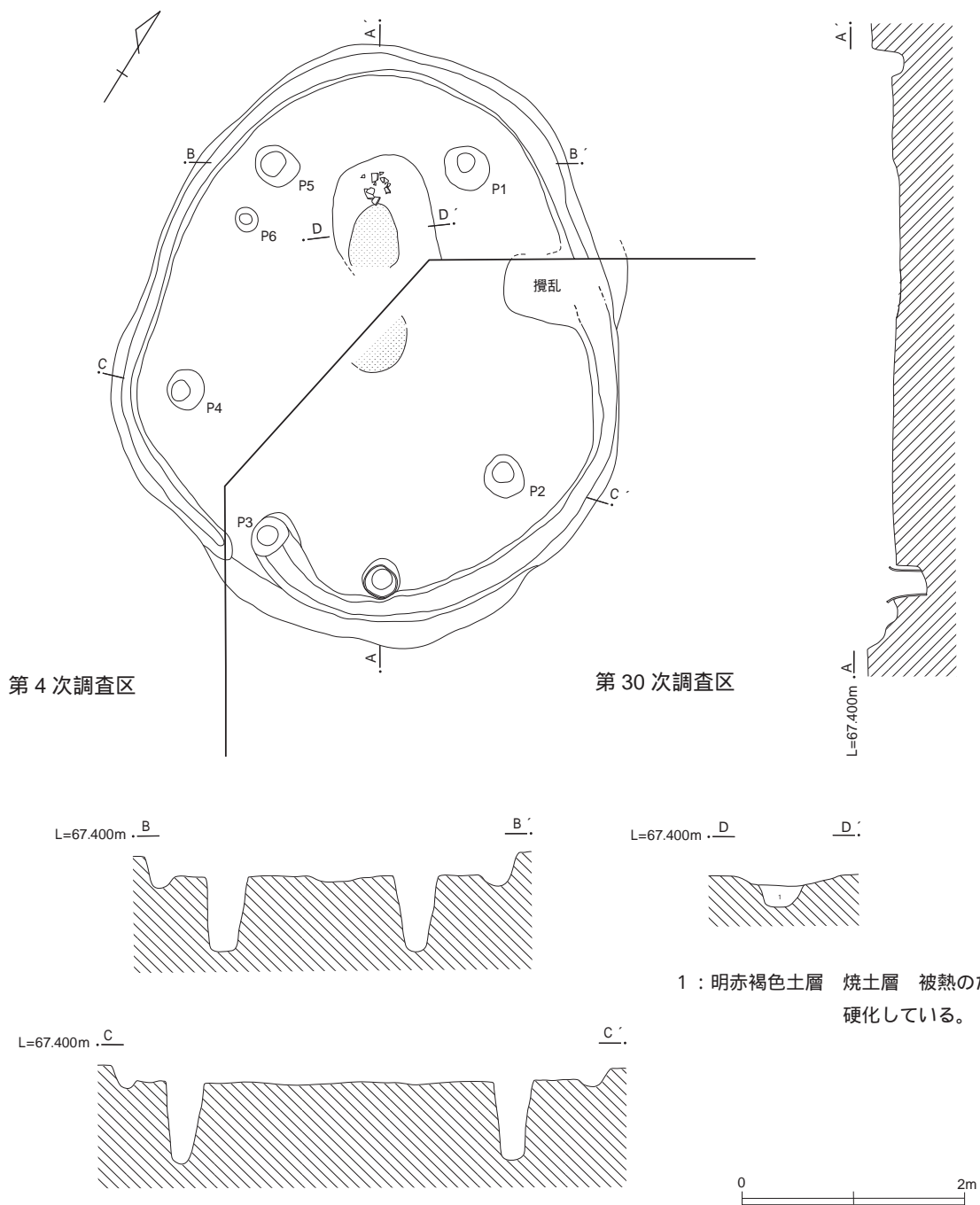
炉跡は遺構中央より北側に偏在する。第4次調査で検出されているが、調査区境目の南側は不明となっている。炉縁石、埋設土器は確認されていないため、地床炉と思われる。平面プランは南北に長い不整楕円形を呈し、長径推定1.20m、短径0.92m、焼けて硬化した面までの深さは8cm前後を測る。被熱による硬化は、さらに20cm下まで及んでいた。第30次調査区では、本炉跡とは別に推定径0.6mほどの焼土化した床面が検出されているが、炉跡であるかは不明である。

屋内埋嚢は深鉢の胴上半部で、南壁壁溝に接して正位で埋設されていた。底部を欠損する。埋設時の掘方は土器とほぼ同規模で、隙間にはロームが充填されていた。深さは28cm前後で、土器は床面より6～8cmほど突出する。

覆土内の遺物は、第4次調査で大量の土器が出土している。時期的には加曾利E式土器及び連弧文土器を主体とし、遺構構築時期を示す屋内埋嚢より新しい。覆土形成過程で時期差が生じた好資料であるが、出土遺物の量比は第4次調査が第30次調査を凌駕するため、今回は割愛し第4次調査の報告書に掲載することとした。

本住居跡の時期は、覆土内出土遺物との時間差が看取されるが、屋内埋嚢から加曾利E式新段階（大木8b並行）とする。



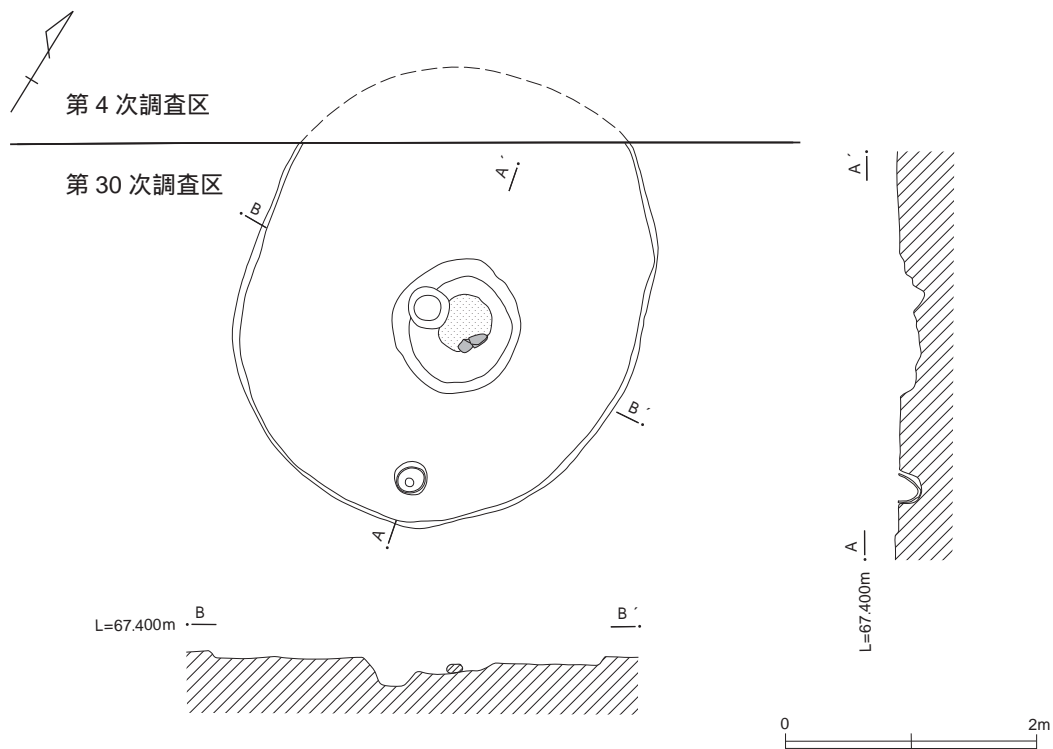


第4図 第74号住居跡

第141号住居跡（第5図）

本住居跡は調査区北壁の中央で検出された。西側に第74号住居跡が近接する。壁、床面とも牛蒡の耕作痕により攪乱され遺存状態は不良であるが、屋内埋甕が残存していたため、遺構の規模、構築時期の推定が可能となった。

平面プランは、北側の一部が調査区外となるため不明確であるが、比較的整った楕円形を呈するものと思われる。炉跡中央と、屋内埋甕を結んだ線を主軸とすれば、方位はN - 14° - Wを指している。規模は



第5図 第141号住居跡

長径推定3.70m、短径3.08m、深さは10cm前後を測る。床面は概ね平坦であるが、軟弱であった。柱穴及び壁溝は検出されなかった。

炉跡は、遺構中央より若干南寄りに位置する。一部、牛蒡の耕作による攪乱を受けている。平面プランは、やや不整な円形を呈し、規模は1.10m × 1.04mと南北径がわずかに長い。深さは10cm前後を測る。また、西壁にかかって深さ20cmほどのピットが検出されている。検出状況から地床炉と思われるが、中央の被熱で硬化した部分の周囲が窪み、さらに覆土中から被熱のため破損した自然石が出土していることから、石囲炉の炉縁石を外した可能性も考えられる。

屋内埋嚢は、炉跡南端から約0.6m南で検出された。住居跡の南壁より若干内側に位置する。正位埋設であるが、わずかに遺構内側に傾斜する。埋設されていた土器は、深鉢の胴下半部で底部を残している。

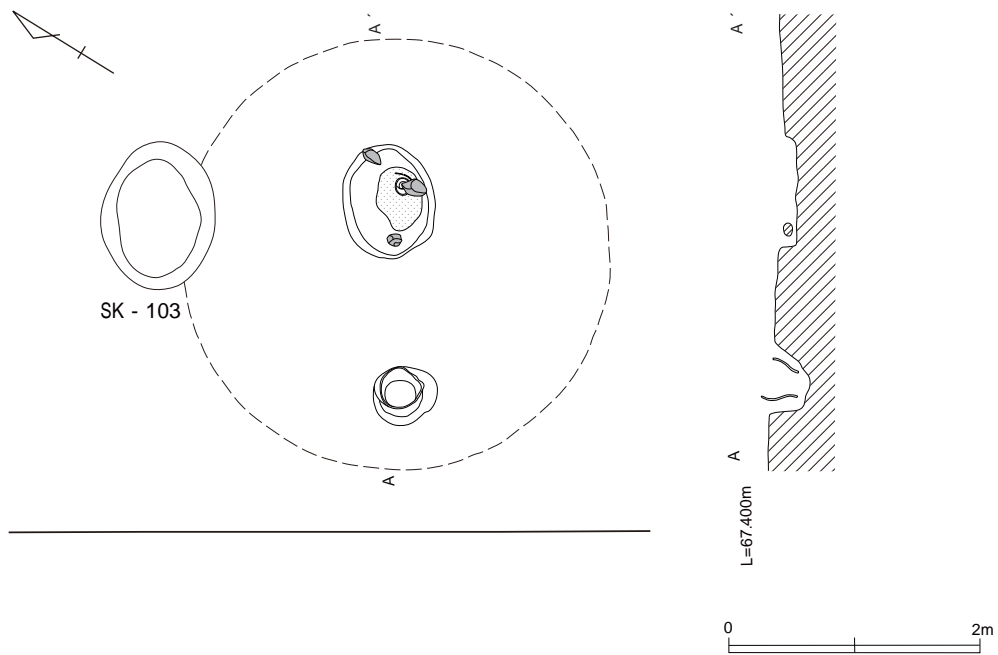
覆土が極めて薄いため、屋内埋嚢以外の遺物は縄文土器の細片数点のみである。

本住居跡の時期は、屋内埋嚢から加曽利E式段階と考えられる。また、炉跡と屋内埋嚢の近接した位置関係から、本住居跡は中期末に出現する小型住居に類するものと思われる。

#### 第142号住居跡（第6図）

本住居跡は試掘調査時に埋嚢が確認され、本調査の時点で炉跡が検出され、住居跡と確定したものである。北側に第74号住居跡及び第103号土壌が位置する。壁は耕作により削平されており、床面の遺存状態も不良であるが、第141号住居跡と同様、炉跡、屋内埋嚢の残存により、遺構の大まかな規模、構築時期の推定が可能となった。

平面プランは不明であるが、炉跡と屋内埋嚢の位置関係から、直径3.4m程度の円形プランを想定した。



第 6 図 第142号住居跡・第103号土坑

炉跡中央と、屋内埋甕を結んだ線を主軸とすると、主軸方位はN - 59° - Eを示す。床面は牛蒡の耕作痕でかなり荒れており、硬化面はほとんど認められなかった。柱穴及び壁溝は検出されていない。

炉跡は、遺構中央に位置し、比較的整った楕円形を呈する。規模は長径1.05m、短径0.85m、炉底までの深さは12cmを測る。炉底は平面楕円形に被熱で硬化した部分があり、この中に小型の深鉢が埋設されていた。覆土中からは、被熱痕跡を残す自然石が3点出土している。第141号住居跡と同様、石囲部分が壊されている可能性がある。

屋内埋甕は、炉跡南端より南へ1mの位置に埋設されていた。やや大きめの深鉢で、口縁部から胴上半部が使用されている。正位埋設であるが、第141号住居跡のものと同じく、若干内側に傾斜している。

本住居跡の時期は、炉埋設土器及び屋内埋甕から加曽利E式段階（吉井城山類段階）とすることができよう。

## 土坑

### 第103号土坑（第6図）

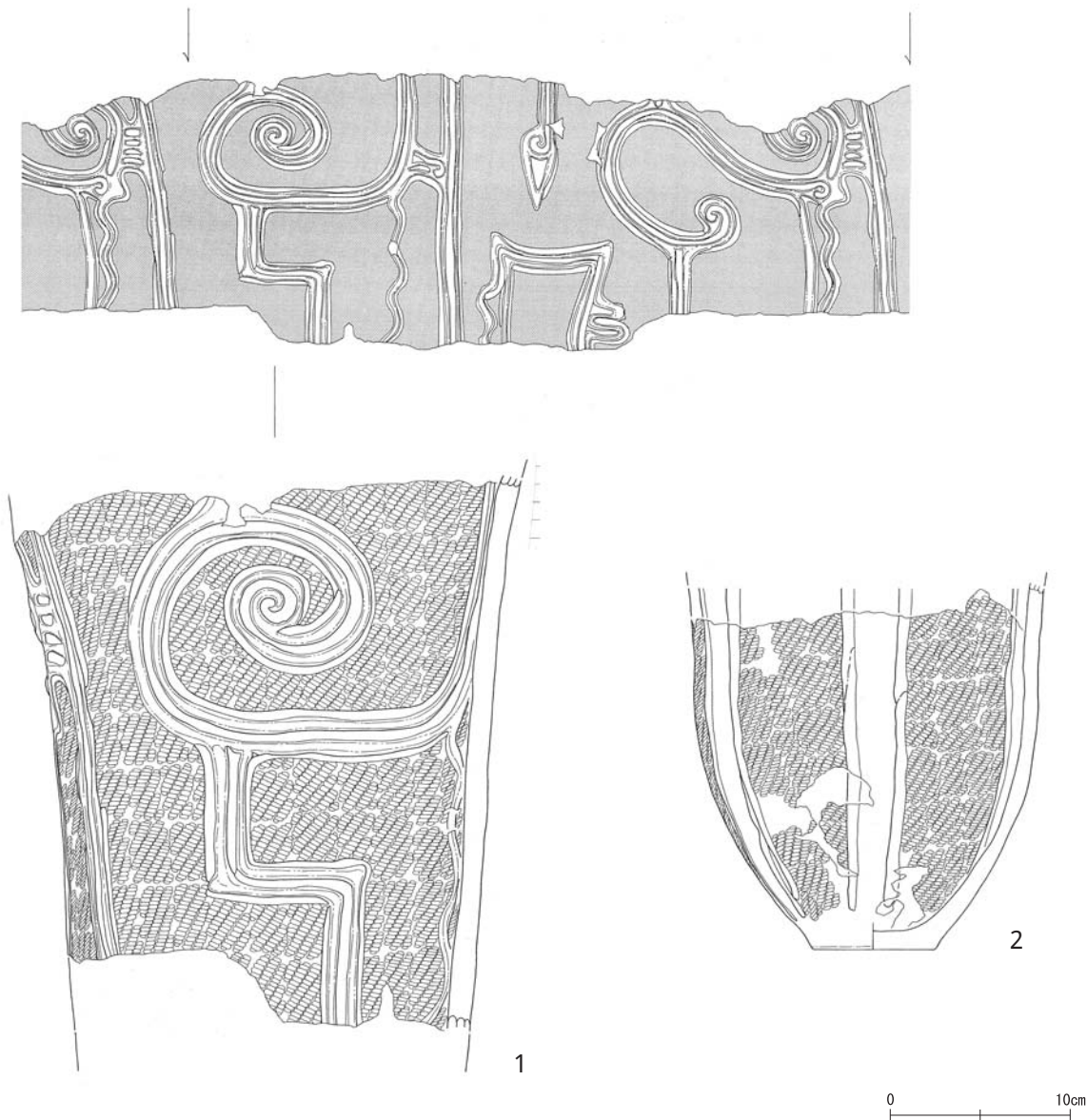
第142号住居跡の北側に位置する。平面形は楕円形、規模は長径1.35m、短径1.05m、深さ30cmを測る。土層は2層に分かれる。上層は黒褐色土層で、ローム粒、炭化物、焼土粒が混入が見られる。下層は黄褐色土層で、ロームブロックを主体とする。性格等詳細は不明である。

覆土中から、縄文中期末の土器破片が少量出土している。

## 出土遺物

### 第74号住居跡出土遺物（第7図1）

第7図1は屋内埋甕である。加曽利E式新段階。円筒形の胴部上半部で、下半部から底部は欠損する。

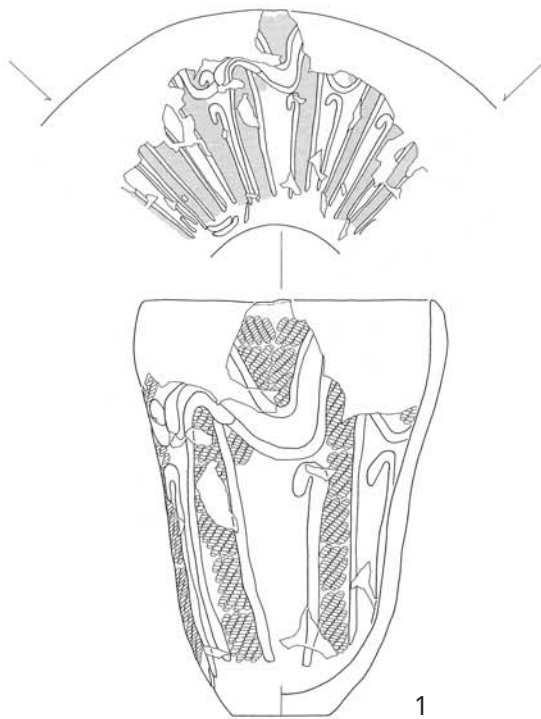


第7図 第74・141号住居跡出土遺物

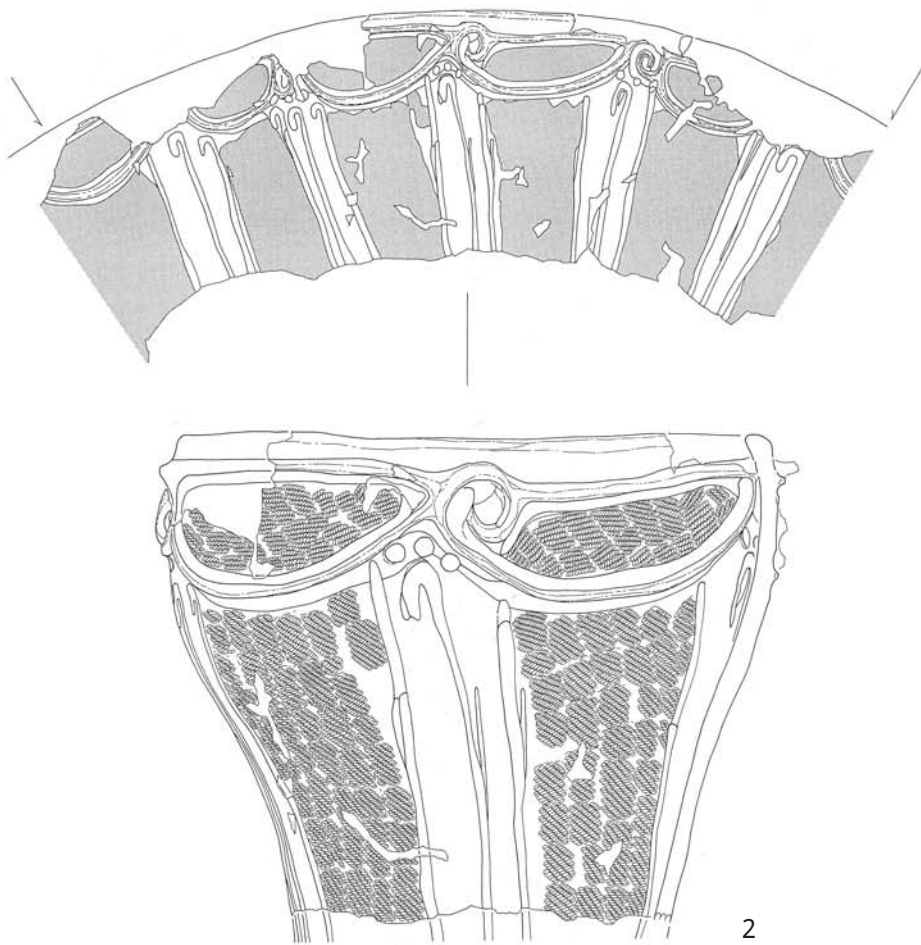
胴部文様は2本組み隆帯を2単位垂下させ、大きく2分割する。文様は1単位が大柄な渦巻文とクランク文の組み合わせを展開し、もう1単位は横S字文を主モチーフとして剣先文や楯状文を空間に置く。また、両単位ともに主モチーフに蛇行隆帯、梯子状文を付随させる。隆帯脇には、ほとんどが太目の沈線を施している。地文は単節RLの縦位施文で、文様作出前に施文する。現存高36.6cm、器厚1.2～1.4cmを測る。焼成は良好であるが、一部に器面の荒れが認められる。図化部分で90%残存。

第141号住居跡出土遺物（第7図2）

第7図2は屋内埋甕である。胴下半部から底部にかけて残存する。器形は、やや丸みを帯びており底部は上底ではないが小型化している。懸垂文は太目の沈線であるが、浅くなぞり状を呈する部分がある。地文部と磨消部は各6単位。磨消部はやや幅広で、比較的新しい様相を示していると思われる。地文は単節RLで縦位施文。部分的に懸垂沈線にかかる。現存高20.1cm、底径6.8cm、器厚0.7～1.2cmを測る。焼成良好。図化部分で90%残存。



1

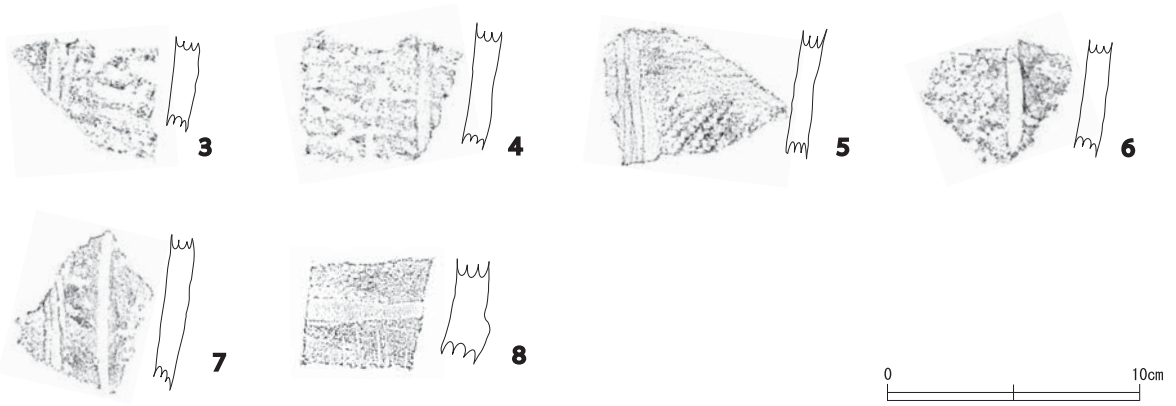


2

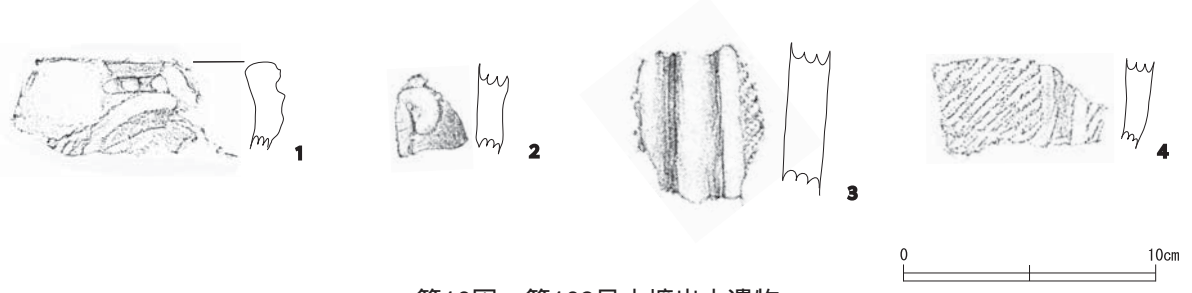


第 8 図 第142号住居跡出土遺物 ( 1 )

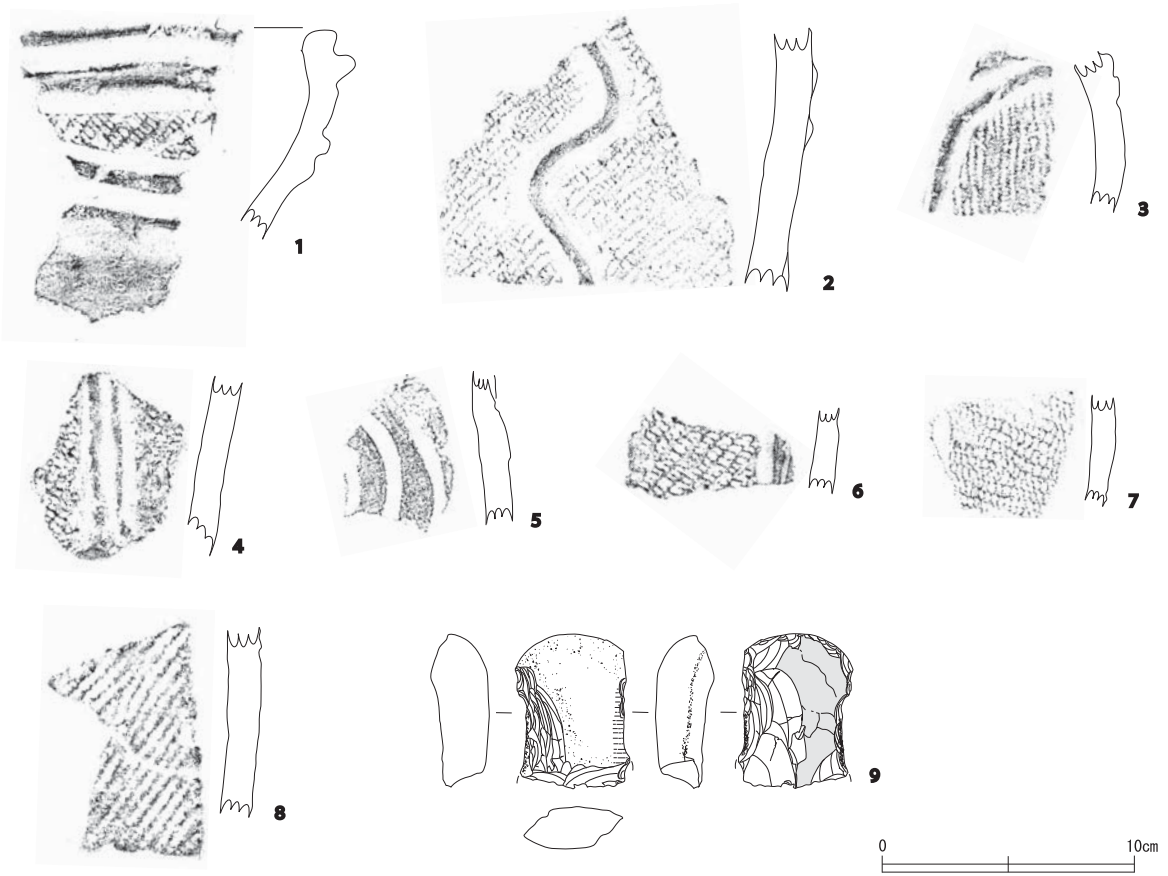




第9図 第142号住居跡出土遺物(2)



第10図 第103号土壙出土遺物



第11図 表採遺物

#### 第142号住居跡出土遺物（第8・9図）

第8図1は炉埋設土器である。所謂吉井城山類で、小型の深鉢である。器形は、底部から口縁部に向けて直線的に立ち上がるもので、中位での括れが弱い。口縁部はわずかに内湾する。文様は2段構成を採り、上半部は一部を残すのみで不明確であるが、推定6単位の波状文、中位から下半部は逆U字区画と蕨状文の交互配置を基本としているが、上下文様の入り組み方が弱い、上部の波状文の下端が逆U字区画に接合する、地文施文部分の不統一など、一般的な吉井城山類のイメージから外れた文様構成の乱れが認められる。地文は単節RLで、口縁部のみ横位、他は縦位施文。器高21.9cm、口径推定15.0cm、底径5.1cm、器厚0.9～1.3cmを測る。焼成は良好であるが、炉埋設土器のため被熱痕跡が顕著で、特に内面の荒れが著しい。全体の70%が残存。

第8図2は屋内埋甕である。口縁部から胴上半部を残すが、口縁部の約1/2を欠く。器形は緩く湾曲しつつ立ち上がり、口縁部は若干内湾する。口縁部文様は大小の半円形区画を5単位配し、区画接合部に渦巻文を置く。文様作出隆帯は薄く、断面三角形を呈する。特に渦巻文上端は板状に突出する。渦巻文直下には棒状施文具による3箇所の刺突を施している。胴部は基本的に2本の懸垂沈線で無文部を作出し、中央に蕨状文を置くものであるが、無文部両側の区画懸垂文が蕨状となったり、3本の懸垂沈線がすべて蕨状文の単位も見られ、繰り返しを拒否するような描き方をしている。無文部は口縁部渦巻文の直下に置かれ、地文部とともに5単位構成を採っている。地文は非常に細かい単節LRの原体を使用し、口縁部区画内は縦位、斜位施文、胴部は縦位に施文されている。現存高26.4cm、口径推定28.8cm、器厚0.9～1.1cmを測る。焼成は良好であるが、器面の荒れが目立つ。図化部分で80%残存する。

第9図3～9は中期後半、加曽利E～式と思われる。3～5は同一個体で、いずれも胴部破片で懸垂文が見られる。上半部は横位の調整痕、下半部は単節RLが縦位施文されている。6・7も胴部破片で、懸垂文が認められる。地文は単節LRで、縦位施文。9は厚手の鉢形土器の頸部で、胴部には条線を施している。

#### 第103号土壇出土遺物（第10図）

第10図1～4は、いずれも中期末のものである。1・2は加曽利E式、吉井城山類で1は口縁部直下に列点を持ち、2本沈線による波状文の上端が確認できる。地文は単節LR。2は蕨状文の上端を残す。3は大形の深鉢の胴部破片。2本の隆帯と地文単節LRの充填施文が認められる。4も吉井城山類と思われる、1と同一個体の可能性がある。波状文の下端部と思われる。地文は単節LR縦位で充填施文。

#### 表採遺物（第11図）

1～4は加曽利E式新段階。1は口縁部破片で、隆帯による区画文の一部が見られ、頸部には無文帯を置く。地文は単節RLの横位施文。2は胴部破片で、蛇行隆帯を垂下させている。地文は単節RLの縦位。3も胴部破片で、2本隆帯による渦巻文の一部であろうか。地文は単節RLの斜位施文。4は2本隆帯の懸垂文に地文単節RLの縦位施文が見られる。5は複沈線による渦巻文が描かれている。6～8も胴部破片で、6・7には懸垂文が認められる。地文が6・8が単節RL、7が単節LRで縦位に施文している。9は、撥形の打製石斧で、刃部を欠く。正面に大きく自然面、裏面に主要剥離面と節理面を残す。両側縁の調整は、正面左側に顕著に施されている。残存長6.2cm、幅4.5cm、厚さ2.3cm、重さ68gを測る。安山岩製。

# まとめ

## 加曽利 E 式土器編年の現状

第142号住居跡は覆土がほとんど削平されているため、遺物量は極めて少ない。炉埋設土器及び屋内埋甕（第8図1・2）が出土している他、若干の土器片が出土しているのみである。住居跡の時期については、埋設土器2個体が決定要件を満たしているため、本住居跡は加曽利 E 式段階のものとしてできよう。ただし、近年、中期末の編年については見直しや再検討（橋本1994、谷井・細田1995・1997、金子1996、渡辺1998）が進められており、現在も県内研究者の間でさえ共通理解が確立されていないように思われる。ここでは、第142号住居跡から出土した2個体の土器が現時点で中期末編年のどの段階に位置付けられるか、近年の編年研究を振り返りながら考えてみたい。

1982年に発表された「縄文中期土器群の再編」（以下、「埼玉編年」）は、谷井彪氏、宮崎朝雄氏を中心とした（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団の縄文部会有志が、南関東地方中期初頭五領ヶ台式から中期末加曽利 E 式までの膨大な資料を検討し練り上げられたもので、現在に至るまで県内研究者、自治体埋蔵文化財担当職員の発掘資料検討の基本文献となっている（青木他1982）。この中で 期（加曽利 E 式土器）を担当した青木美代子氏は、本期の在り方を「加曽利 E 式の伝統と、波状沈線文のモチーフを基調とする土器群が相容れる中、後者がより主体的なあり方を見せているのが第 期の特徴」としている。「加曽利 E 式の伝統（を引く）」土器は口縁部文様を残存させた土器群、波状沈線モチーフの土器とは現在で言う吉井城山類である。「後者がより主体的なあり方」という認識は、本論考以前よりの考え方でもあり、現在でも加曽利 E 式土器の始まりを吉井城山類の出現を定点とする底流となっている。これらに、胴部文様を隆帯で描くもの（現在の梶山類）、懸垂文のみのもを加えた4系統が加曽利 E 式を構成する基本的な土器群とし、さらにこれらが文様レベルで交換や、地文部と磨消部、沈線と隆帯の変換などを行うことにより、様々なタイプの土器を発生させるとした。なお、当時、加曽利 E 式の細分の可能性も指摘されていたが、資料的制約のため本論考では一段階として設定されている。

橋本勉氏は、1994年に『原山坊ノ在家遺跡』の報文で加曽利 E 式を構成する系列を加曽利 E 系列、曾利系列、波状沈線区画紋系列（吉井城山類）、胴部渦巻紋系列（梶山類）、楕円沈線区画紋系列（逆U字懸垂文類）に区分し、各系列同士の文様レベルの交換と関係性を表し、同時性を示した。この同時性（換言すれば情報の共有）を前提とし、これらの系列のうち、胴部渦巻紋系列と楕円沈線区画紋系列を含む土器群を出土した住居跡について、同時性の連鎖を探り、加曽利 E 式と大木9式の直接的な比較検討の可能性を提示している。従来、加曽利 E 式と曾利式の段階ごとの変化、同時性の検討については、かつて神奈川県考古同人会の主導により開催された「シンポジウム 縄文時代中期後半の諸問題」（鈴木他1980）以降、多くの研究者が取り扱ったところであったが、大木式、それも東北地方北部まで検討対象とし、またその方法の基本姿勢を明確に打ち出したという点で本論考は高く評価されよう。橋本氏は本論考を経て2004年に「加曽利 E 式土器の拡散とフィードバック（前）」を表し、東北地方から関西圏までの広域で方法の具体化に努めている（橋本2004）。なお、1994年の論考では各系列に磨消縄文が例外なく見られ、各々の文様交換による同時性の保障とする観点から、加曽利 E 式の細分はなされておらず一段階として設定されているが、2004年の論考では冒頭に「加曽利 E 式に始まる流麗な磨り消しの拡散」という文言が見られ、



且つ宿東報告（渡辺1998）5・6期の分別を容認していることから、磨消縄文の発生及び吉井城山類の成立をもって加曽利E式とし、新旧の二段階区分を視野に入れているものと思われる。

谷井彪、細田勝両氏は、1995年に「関東の大木式・東北の加曽利E式」を発表した（谷井・細田1995）。本論考は、関東、東北の土器に見られる諸類型を、それぞれの地域で異系統とされる土器、関東では大木式、東北では加曽利E式を鍵として分析し、中期末から後期初頭における加曽利E式・称名寺式と大木式の並行関係を明確にすることを目的としている。その作業の中で、加曽利E式は時間的な独立性を失い、加曽利E式段階、称名寺式段階に振り分けられている。これについては、前述の橋本論文及び細田氏の『樋ノ下遺跡』報文で既に言及されている（橋本前掲、細田1994）。本論考では、加曽利E式土器は古・新の二段階に区分される。古段階は、加曽利E式の「象徴」とも言える吉井城山類の出現段階（大木9式古段階）で、組成内容は前述の青木、橋本両氏の規定とほぼ同一と思われる。新段階は、梶山類の出現をもって成立し、この中に従来加曽利E式とされていた土器群の一部が入る。また、吉井城山類も抱玉文が施されるものや、沈線が隆帯に変更されるなどの変容が認められる。本論考は、「埼玉編年」で資料的な制約から一段階に設定され、その後も漠然と考えられていた加曽利E式の新旧区分が大木式土器の編年と整合性をもった形でなされたという点で評価される。ただし、編年表を見ると、新段階には加曽利E系土器の口縁部文様帯を残存させた土器群は提示されていないのが分かる。しかし、先の橋本1994論考に示された山遺跡4号住例に見るように、梶山類と口縁部文様帯を有する土器の融合も認められる。すなわち梶山類の成立をもって新段階とするには、なお検討の余地を残していたと思われる。また、新旧両段階に口縁部文様帯を残すキャリパー類の土器群が認められることは、金子直行氏の指摘もある（金子1996）。

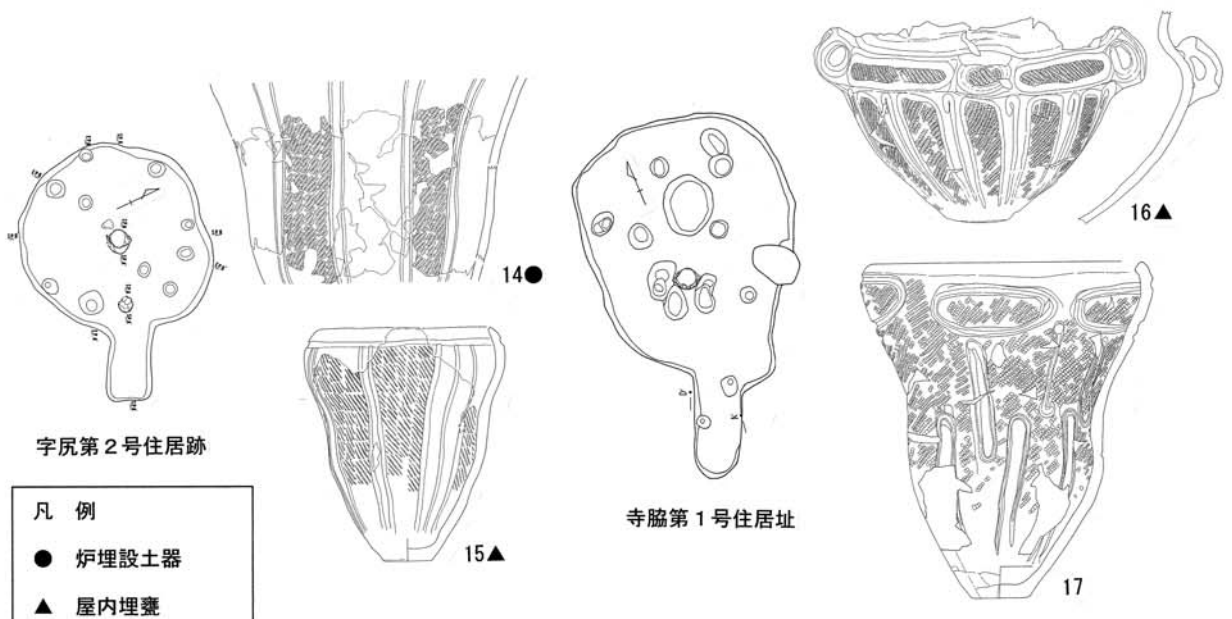
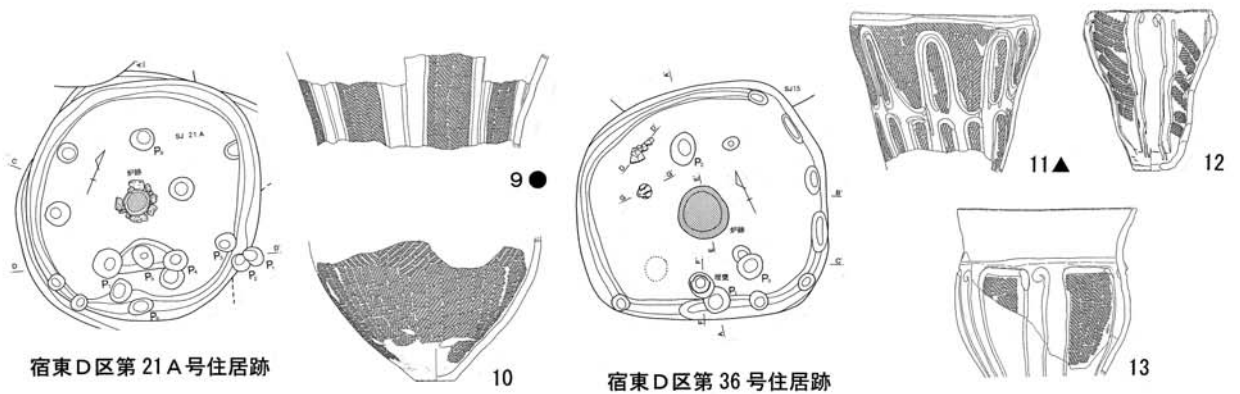
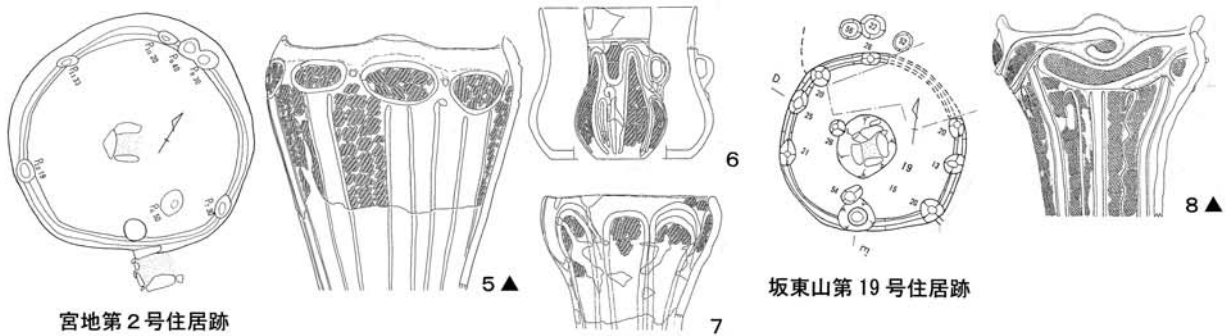
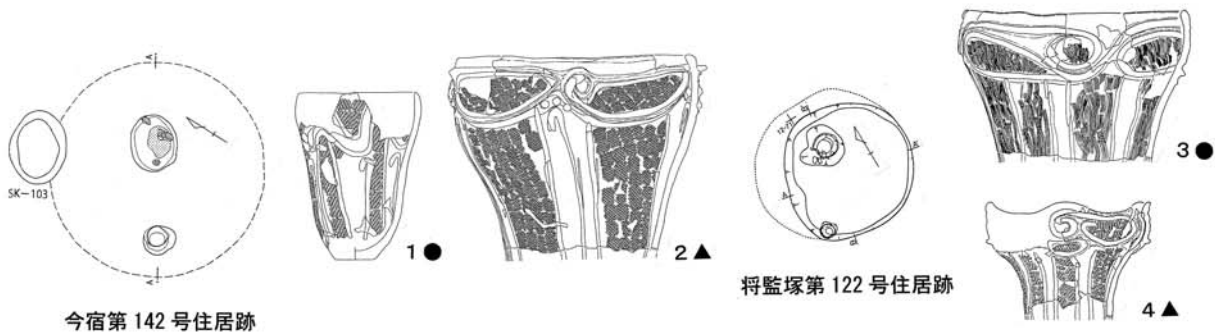
1996年、金子直行氏は『大山遺跡 第9次調査』報文で加曽利E式からE式について再編を試みている（金子前掲）。金子氏は、かつて「埼玉編年」で加曽利E式（ $a \cdot b$ 期）を担当しており、大山報文では自らの論考を再考し、近年の研究動向を踏まえた上で、加曽利E式からE式に至る四段階の編年案を提示している。今回問題となる加曽利E式については、第3・4段階が該当する。第3段階は、「加曽利E式終末からE式初頭段階で、胴部に磨消懸垂文が成立する段階。連弧文の変化段階の土器群が伴い、口縁部文様帯を消失する土器が出現する段階」、第4段階は、「加曽利E式段階で吉井城山類、梶山類が出現する段階。口縁部文様帯を持つキャリパー系土器が主体的に残存し、従来の加曽利E式新段階、E式古段階の土器群が含まれる段階」とし、従来の型式観や呼称とはずれると断りながら、それぞれ加曽利E式古段階、E式新段階とした。金子氏は、旧論考において加曽利E式終末とした土器群の一部を、「磨消縄文手法の成立と共に懸垂文間の連結、曲線化が進められ、また連弧文土器の描出手法にも影響をあたえ、組み合わせる土器群にE式的な要素の萌芽が認められる」ことにより、過渡的な評価を改めE式古段階に含めている。この古段階、「埼玉編年」 $b$ 期の資料には、前段階の胴部に施された蛇行隆帯が沈線化したと思われる蛇行懸垂文が地文部に見られるようになるが、先端部は新段階の吉井城山類に見られる蕨状文と同様の表現がなされている。また、磨消縄文手法の成立により生成された土器群の中には、沈線間が磨り消された連弧文土器があるが、古段階ではこれを含めた「変化した連弧文土器」が残存し、E式新段階ではこれらがほぼ消滅して吉井城山類がこれに代わるという変遷観は、先の蛇行懸垂文のあり方も含めて、E式終末を過渡期として考えるより、E式内における磨消縄文の確立、普遍化及び変化までの時間差を示唆する点で、筆者には、より説得力を持つように思える。

谷井彪、細田勝両氏は、1995年に論考に続き「水窪遺跡の研究 加曽利E式土器の編年と曽利式の関係

からみた地域性」を公表した(谷井・細田1997)。前論考は中期末から後期初頭における加曽利E式と大木式の並行関係について考究したものであるが、本論考は、副題にあるように曽利式土器との時間的關係を俎上に上げ、加曽利E式から後期初頭に至る編年の再考を試みている。注目すべきは、加曽利E式土器について、前論考で一応の決着を見た二段階区分が再び一段階に統合されたことである。統合されたE式について、「前時期に出現した磨消縄文と文様意匠の沈線化や単位文化が急速に波及した時期」とし、多系統の土器群が「同一時期幅での系統差を含む土器群」と評価した。新旧を統合した理由については、旧稿において加曽利E式古・新に対応させた大木9古・新の細分の矛盾と「大柄渦巻文梶山類がE式前半でも後半でも存在したこと」を主たる理由とし、「修理山遺跡第6号住居跡や11号住居跡ではまさに両者が共存しており、強引な細分であったこと改めて痛感した」としている。編年表に例示された土器群を見ると、口縁部文様を有する加曽利E系土器、胴部懸垂文のみの土器、吉井城山類の他、旧稿で新段階とされた梶山類、抱球文の土器がある。後二者については、「吉井城山類の変形とされたいわゆる抱球文の土器は、東関東では17の胴部渦巻文を持つ梶山類と共存し、先の土器群(口縁部文様帯系土器、吉井城山類、両耳壺形土器)とは伴出関係に乏しいことから、時期的に区分し、加曽利E式やE式新段階として扱ってきた」とし、さらに「E式新段階には、キャリパー形の口縁部文様帯系の土器や吉井城山類や梶山類が含まれず、抱球文やJ字文等の土器に両耳壺を伴う土器組成を主体としている場合が多く、柄鏡形(敷石)住居跡から出土する機会が多いことから、いきおい時間差として解消される傾向が強かった」と述べている。当時、狭山市字尻遺跡第2号住居跡(石塚1995)や北本市提灯木山遺跡第1号住居跡(磯部1996)等、E式段階の柄鏡形住居跡の存在が確認され始めたが、より後出的な文化要素という認識もあり、そこに先入観が介在したとも考えられる。

渡辺清志氏は『宿東遺跡』報文で、出土土器の段階変遷をまとめている(渡辺1998)。問題となる加曽利E式は第5・6期の二段階としている。第5期はE古段階で、「キャリパー類において磨消し縄文が出現し、また磨消し連弧文が出現する」他、吉井城山類を本段階に含めている。金子氏の論考と同様、磨消し縄文の出現をもってE式とするが、吉井城山類の要素を前段階(第4期)の大波状と懸垂文の融合に求め、第5期に吉井城山類の確立を見るとした。D区第15号土壌からは吉井城山類に磨消し縄文と蕨状文を施した連弧文土器伴っており、本庄市将監塚遺跡第50号住居跡(石塚1986)出土土器と同じ組成である。ただし、両者の口縁部文様帯系土器を見ると渦巻文が既に区画文化しており、これをもって第6期とすることも可と思われる。第6期(E式新段階)では連弧文土器に代わり吉井城山類の一般化とバリエーションの展開、区画文化あるいは単位文化した口縁部文様帯系土器の残存、梶山類や抱球文の土器が成立する他、両耳壺が定着する。この定義は、金子氏のE式新段階に同じで、両者の差異は吉井城山類の出現時期のみにあると言えよう。

以上、長々と加曽利E式関連の論考について思うところを述べてきたが、青木氏の論考を除けば、ここ10数年の研究動向にあっても、研究者間で資料解釈の相違、それに伴う混乱が現出しているのに驚く。これらの諸研究のいずれを是とするか、敢えて言えば金子氏の論考を採りたい。金子氏は、既に述べたように磨消し縄文成立をもって加曽利E式とし、後に普遍化・多様化の過程を踏むとして、二段階に区分した。橋本氏も述べるように、磨消し縄文の成立は、手法の定着を見てのち、西の中津式・称名寺式土器、東の後期大木式といった広域に磨消し縄文系土器群を生成する。すなわち、手法の成立が中期的な土器群の構造変化の引き金となったと解釈され、変換の画期として中期という流れの中で最も大きな意味を持つと思



凡例

● 炉施設土器

▲ 屋内埋壺

第12図 加善利 E 式期の住居跡



われる。無論、他の諸論考にこのような視点が欠けていたという訳ではないが、吉井城山類の出現以上の深い意味を加曾利 E 式土器の成立に持たせたという点で評価したい。最後に、今宿遺跡第142号住居跡出土土器については、上記の検討から、金子氏の編年案に準拠し、加曾利 E 式二段階編年の新段階に位置付けて本項の結びとしたい。

#### 加曾利 E 式期の住居跡について

加曾利 E 式期の住居跡については、騎西町修理山遺跡（吉田1995）、狭山市字尻遺跡（石塚前掲）、北本市提灯木山遺跡（磯野前掲）等で柄鏡形住居跡の存在が確認され、報告も徐々に増えつつある。これに加えて、同時期の張出部を持たない小型住居跡の報告も散見される。第12図は、検討のため県内の事例から抽出したものである。管見に触れたもののみで地域的な偏りがあるが、およその傾向は探れるものと思う。また、これらの住居跡例は、前項で見たように、以前は加曾利 E 式段階あるいは加曾利 E 式古段階とされたものであるが、今回準拠した金子氏の編年案ではいずれも加曾利 E 式新段階に位置付けられるものである。以下、各遺構について概要を述べる。なお、数値データ等は各報告書に準じ、スケールは遺構を 1/120、土器を 1/10 に統一した。

##### 狭山市今宿遺跡第142号住居跡

今回報告の資料である。無柱穴タイプ。遺存状態は不良で、壁は検出されず、床面にも攪乱が及んでいた。平面プランは不明であるが、炉跡と屋内埋甕の位置関係を鑑み、直径3.4m程度の円形プランと考えた。炉跡は土器埋設炉であるが、石囲土器埋設炉の可能性もある。炉底は被熱痕跡が顕著で、中央やや東寄りに吉井城山類の小型深鉢が埋設されていた（第12図 1）。屋内埋甕は、炉跡南端より南へ 1 m に位置する。口縁部文様帯系の土器（ 2 ）。正位埋設で、若干遺構内側に傾斜している。

##### 本庄市将監塚遺跡第122号住居跡（石塚前掲）

本遺構も炉跡と埋甕の検出を持って住居跡としたものであるが、平面プランについては疑問が残り北及び西側に広がる可能性がある。無柱穴タイプ。規模は2.50×2.38mの不整楕円形で、掘り込みの深さは28cmを測る。今回例示した資料中では最小である。炉跡は土器埋設炉で、埋設されていた土器は口縁部文様系土器で渦巻文が区画化している（ 3 ）。屋内埋甕は炉跡南端より 1 m の位置にあり、正位に埋設されていた。4 単位の突起を有する口縁部文様帯系土器（ 4 ）。

##### 狭山市宮地遺跡第 2 号住居跡（城近1972）

加曾利 E 式古段階の第 1 号住居跡と重複する。壁柱穴タイプ。平面形は円形で、規模は径3.7m、深さ38～40cmを測る。壁溝が全周し、壁柱穴が穿たれている。炉跡は遺構中央に位置する。石囲炉であるが、東側の炉縁石を欠く。炉底の被熱痕跡は顕著であった。屋内埋甕は炉跡南端から約 1 m に位置し、壁溝に接している。正位埋設で、内側に11度傾斜して埋設されていた。口縁部文様帯系であるが、区画文化している（ 5 ）。6・7 は床面から出土したもので吉井城山類と胴部懸垂文類の土器で、屋内埋甕と時間的な開きは無い。なお、掲載した土器実測図は再実測したものを使用した。

##### 人間市坂東山遺跡第19号住居跡（谷井1973）

壁柱穴タイプ。一辺2.9mの方形と記載されているが、概ね円形と見て良いだろう。深さは壁の残存部分で15cm前後を測る。壁溝が全周し、壁柱穴が穿たれている。炉跡は中央に位置する石囲炉で、4 個の川原石を使用したしっかりとした作りである。屋内埋甕は炉跡南端より0.5mに位置し、他の類例に比して近接する。今回断面図は掲載しなかったが、報文中の図によると正位埋設で若干内側に傾斜している。埋

設されていた土器は、口縁部文様帯系の土器で、将監塚122号住屋内埋甕に近い様相を呈し、谷井・細田1997の論考で加曾利E式段階に位置付けられたものである(8)。本住居跡は、やや小振りながら、壁柱穴タイプ、炉の形態等、地域的に近接する宮地第2号住に酷似する点で注目される。

日高市宿東遺跡D区第21A号住居跡(渡辺前掲)

主柱穴タイプ(渡辺氏の三本柱穴系列)。プランは不整円形で、規模は直径3.8m、深さ15cmを測る。炉跡は遺構のほぼ中央に位置する石囲土器埋設炉で深鉢の胴部中位を埋設している。土器は懸垂文の無文部中央に沈線を持つもので、蕨状文の可能性があり、懸垂文系土器か今宿142号住屋内埋甕に類するものと思われる(9)。屋内埋甕は無い。10は覆土出土土器で、両耳壺と考えられる。

日高市宿東遺跡D区第36号住居跡(渡辺前掲)

主柱穴タイプ。プランは不正隅丸方形で、3.95×3.70m、深さ42cmを測る。壁溝は東壁の一部の他は全周する。主柱穴の1箇所は攪乱により欠く。炉跡は中央に位置し、地床炉である。屋内埋甕は炉跡南端から0.6mほどに位置し、正位に埋設されていた。吉井城山類(11)。12・13は覆土中より出土したもので、埋甕との時間的な矛盾は無い。

宿東遺跡には、上記2例の他にも炉跡と屋内埋甕が近接した状態で検出された例(D区55・61号住等)があり、これらも無柱穴タイプの小型住居跡の可能性を持つ。

狭山市字尻遺跡第2号住居跡(石塚前掲)

柄鏡形タイプ。主体部は不整円形プランで、径3.0mを測る。張出部は、1.05×0.7mの長方形を呈する。深さは15cm前後だが、炉跡及び屋内埋甕が浮く形となる。遺構全体に貼床がなされていた可能性もあるが、円形プランの主柱穴タイプも視野に入れたほうが良いかもしれない。ただし、ピットの配列に規則性は見出せなかった。炉跡は中央に位置し、土器埋設炉である。口縁部文様帯系土器あるいは懸垂文系土器で、幅狭の2本沈線懸垂文で区画後、地文部と無文部を交互に置く構成を採っている(14)。屋内埋甕は炉跡南端から0.7mに位置する。正位埋設で、内側に向けて傾斜している。懸垂文系土器である(15)。

日高市寺脇遺跡第1号住居址(松本他2006)

柄鏡形タイプ。主体部は不整な円形プランを呈し、規模は4.1×3.4m、深さ10~15cmを測る。張出部は1.7×0.6~0.8m、深さ3~6cmで極めて浅い。炉跡は遺構中央から北に偏在する。一見地床炉であるが、報告者によると「壁に石を置くためのテラス」状の施設があり、石囲炉を想定している。屋内埋甕は炉跡南端から0.6mに位置する。埋設されていた土器は両耳壺で、口縁部文様が区画化し胴部文様に吉井城山類の影響が認められる(16)。17は覆土出土のもので、口縁部に楕円区画文を配する口縁部文様帯系土器であるが、胴部文様は一般的な懸垂文とは異なっている。

以上、各事例について概要を述べたが、これら4タイプは主柱穴タイプが規模を若干拡大するが、3~4m程度の規模、炉跡と屋内埋甕の位置関係が1m以内という近接関係で共通している。いずれも柄鏡形住居跡の主体部の特徴にも通ずる。柄鏡形タイプについては前述したように県東部にも事例があり、加曾利E式新段階には一定の広がりを持っており、これに加えて他の3タイプが各集落内で、どのような関係を持っているか。また、これらの遺構の初源をどの段階に見出すか。周知のように加曾利E式段階の住居跡は、径6~7mの比較的大型のものが多い。連弧文土器盛行段階、すなわち加曾利E新段階から加曾利E式古段階に移行する過程で、どの段階でこれらの小規模な遺構の出現の兆候が見えるか。その背景には何があるのか。これらの問題も含めて、今後の課題としたい。

引用・参考文献

- 青木美代子他 1982 「縄文中期土器群の再編」 『埼玉県埋蔵文化財調査事業団研究紀要1982』
- 石塚和則 1986 『将監塚 縄文時代』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団第63集
- 石塚和則 1995 『字尻遺跡』 狭山市遺跡調査会報告書第8集
- 石塚和則 1997 『宮地遺跡第5次調査』 狭山市埋蔵文化財調査報告書10
- 石塚和則他 2005 『森ノ上遺跡』 狭山市遺跡調査会報告書第14集
- 石塚和則 2007 『宮地遺跡第6次調査』 狭山市文化財調査報告書第26集
- 磯野治司 1996 『提灯木山遺跡第2次調査』 北本市遺跡調査会報告書第2集
- 金子直行他 1996 『大山遺跡第9次』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団第180集
- 金子直行 1997 『戸崎前遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団第187集
- 金子直行 2006 「縄文中期型集落解体への序章」 『ムラと地域の考古学』
- 黒尾和久他 1995 「多摩丘陵・武蔵野台地を中心とした縄文時代中期の時期設定」  
『シンポジウム 縄文中期集落研究の新地平』 発表要旨・資料
- 城近憲市他 1972 『宮地』 狭山市文化財調査報告
- 新藤 健 2007 『西上遺跡 第1次調査・遺物編』 所沢市埋蔵文化財調査報告書第41集
- 鈴木保彦他 1981 「シンポジウム 縄文時代中期後半の諸問題」 『神奈川考古』 第11号
- 谷井 彪他 1973 『坂東山』 埼玉県遺跡調査会報告書第2集
- 谷井 彪・細田 勝 1995 「関東の大木式・東北の加曾利E式土器」 『日本考古学』 第2号
- 谷井 彪・細田 勝 1997 「水窪遺跡の研究」 『埼玉県埋蔵文化財調査事業団研究紀要』 13
- 坪田幹男他 1996 『西ノ原遺跡』 大井町遺跡調査会報告第6集
- 戸田哲也 1999 「関東地方 中期(加曾利E式)」 『縄文時代』 10
- 橋口尚武 1983 「加曾利E式土器の研究史的考察」 『考古学雑誌』 第69巻第1号
- 橋本 勉 1994 『原山坊ノ在家遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第144集
- 橋本 勉 2004 「加曾利E式土器の拡散とフィードバック(前)」 『埼玉県埋蔵文化財調査事業団研究紀要』 第19号
- 細田 勝 1994 『樋ノ下遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第135集
- 浜野美代子他 1990 『提灯木山遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第92集
- 松本尚也他 2006 『寺脇』 日高市埋蔵文化財調査報告書第32集
- 宮井栄一 1989 『古井戸 縄文時代』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団第75集
- 富元久美子他 2001 『落合上ノ台遺跡』 医療法人くすのき会飯能ホスピタル地内埋蔵文化財調査報告書
- 吉田 稔 1995 『修理山遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第158集
- 渡辺清志他 1998 『宿東遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第197集

写真図版



図版 - 1



今宿遺跡第30次調査区全景

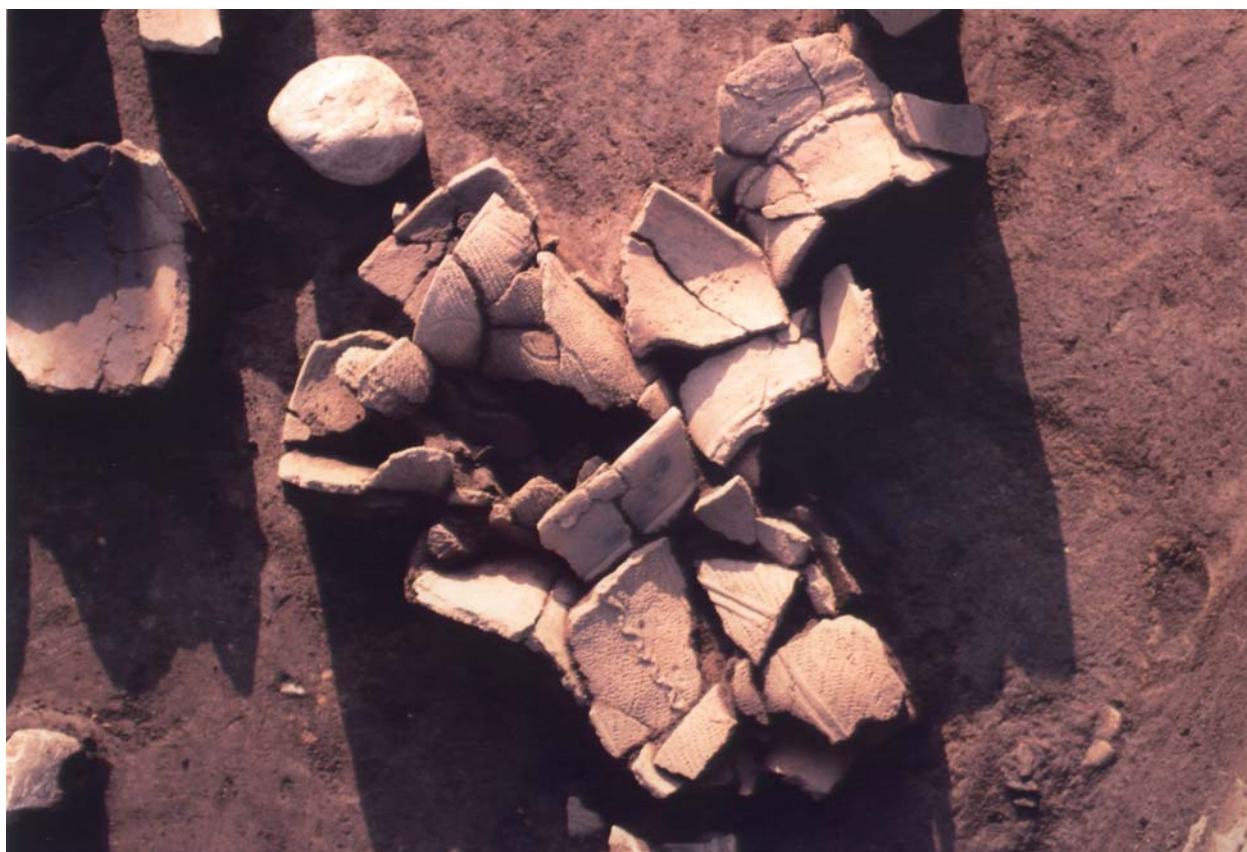


第74号住居跡全景（第4次調査）





第74号住居跡全景（第30次調査）



第74号住居跡遺物出土状況（第4次調査）



图版 - 3



第74号住居跡屋内埋甕

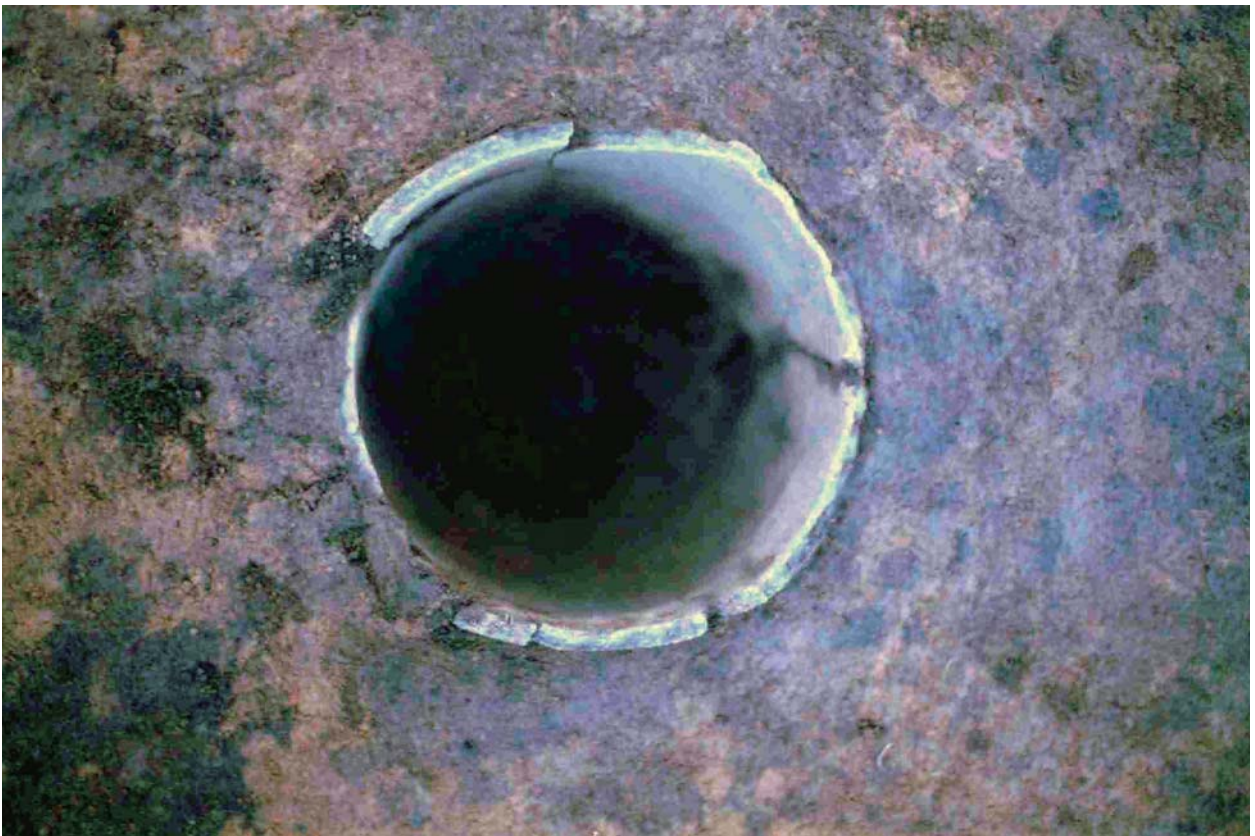


第141号住居跡全景





第141号住居跡炉跡



第141号住居跡屋内埋甕



图版 - 5



第142号住居跡全景



第142号住居跡炉跡





第142号住居跡屋内埋甕



第74号住居跡 (第6图1)



第141号住居跡 (第6图2)



第142号住居跡 (第8图1)



第142号住居跡 (第8图2)

# 報告書抄録

ふりがな	いまじゅくいせき だい30じょうさ							
書名	今宿遺跡 第30次調査							
副書名	宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	狭山市遺跡調査会報告書							
シリーズ番号	第21集							
著者氏名	石塚和則							
編集機関	埼玉県狭山市遺跡調査会							
所在地	〒350 - 1380 埼玉県狭山市入間川 1 - 23 - 5 TEL 04 - 2953 - 1111							
発行年月日	西暦2009 (平成21) 年 2月27日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因
いまじゅくいせき 今宿遺跡	さいたまけん さやまし 埼玉県狭山市 かみひろせ 上広瀬915	市町村	遺跡番号	°	°	19991104 ~ 19991122	144	宅地造成に 伴う事前調 査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
今宿遺跡	集落跡	縄文時代 奈良・平安時代		竪穴住居跡 土壇	3軒 1基	縄文時代中期 土器・石器	縄文時代中期後半の比較 的限定された時期の小規模 集落が確認された。	

狭山市遺跡調査会報告書 第21集

## 今宿遺跡

第30次調査

宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成21年 2月23日 印刷

平成21年 2月27日 発行

発行 埼玉県狭山市遺跡調査会

〒350 - 1380

埼玉県狭山市入間川 1丁目23番 5号

04 - 2953 - 1111

印刷 株式会社 文化新聞社

【正誤表】

今宿遺跡 第30次調査

(狹山市遺跡調査会報告書 第21集)

ページ	行	誤	正
5ページ	11 上広瀬上ノ原遺跡	22005	22007
	48 上中原遺跡	22025	22039
	49 中原遺跡	22025	22038

13ページ(正)

